慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	共産主義者における行動様式の分析 : Gabriel Almond, The appeals of communismを中心として
Sub Title	Comments on "The appeals of communism" by Gabriel Almond
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.2/3 (1959. 3) ,p.92- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590315-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

共産主義者における行動様式の分析

——Gabriel Almond, The Appeals of Communism を中心として——

奈良和重

一　はじめに
二　共産主義者のモデル理論
三　共産主義運動の現實
　Ⅰ　目標の認知
　Ⅱ　戰術的側面の認知
四　共産主義者の社會・心理的特徴
　Ⅰ　社會的特徴
　Ⅱ　政治的特徴
　Ⅲ　共産主義への感應性
　Ⅳ　神經症者のタイプ
五　共産主義者の脫黨過程
　Ⅰ　不滿のタイプとパターン
　Ⅱ　脫黨過程とその後の調整問題
六　むすびに

一　はじめに

リチャード・クロスマンの編集になる『過ちし神』(Richard Crossman〔ed.〕, The God that Failed. Harper & Brothers, New York. 1949) は、今世紀において、涯無き希望と幻想に憑かれて共産主義に轉向した人々が、耐え難き悔恨と絶望に壓しひしがれ、やがてそれから離反するに至つた體驗の記錄である。ここに寄稿した六名（アルツール・ケストラー、イグナツィオ・シローネ、リチャード・ライト、アンドレ・ジード、ルイス・フィシャー、ステファン・スペンダー）の人々はいずれも、西歐デモクラシーと資本主義の未來への信念を失い、彼等の鋭い知性と激しき情熱の故に、やむなく共産主義に新しき救濟を求めていつたのである。かくて、「彼等自身の神の幻想と共産主義國家の現實との懸隔」に搖り覺まされた時、最早傷つけられた彼等は、共産主義への痛烈な憎しみを表明せざるをえなかつた。勿論彼等は、必ずしもマルクスの偉

大な思想に動かされて、共産主義に轉向し、參加したわけではない。善意の人々は、不幸な人々のために、自由のために、社會正義のために、あるものは自ら人生に誠實でありたいと願い、あるものは自己の享受する特權に裏めたさを感じ、あるものは人種的不平等に憤慨し、それぞれ受難の試錬へと立向つていつた。彼等の聖なる魂には、共産主義こそ良心の闘いとして映じたからにほかならない。

このような彼等の態度をプチ・ブルジョワ的感傷とか同情にすぎぬと非難することは易しい。けれども、彼等がヴィヴィッドにその體驗を描く筆致は、型通りの流儀でしやべり、醉い痴れた戰闘的大合唱をうたつている共産主義者より、《共産主義者》というものをより眞實にわれわれに知らしめてくれているのではないだろうか。シローネは冗談まじりにいう、「終局的闘爭は、共産主義者と前共産主義者とのあいだでおこなわれることになろう」と。

ともあれ、共産主義のもつ魅力、そのアピールとは一體何であるのか。六人の苦闘せる遍歴は、雄辯にそれを物語つてくれている。けれども彼等は、みな卓越した藝術的天分を所有する知識人であつた。『過ちし神』は一種の文學作品ともみられよう。われわれは、一般的に、人々が何故共産主義に魅惑され、その運動に參加するようになり、そして何故それから離脱していくのか、という問題を解明できたらと思う。ところが最近、プリンストン大學から、ゲィブリェル・アーモンドが『共産主義のアピール』(Gabriel Almond, The Appeals of Communism, Princeton University Press. 1954) という書を出版した。本書は『過ちし神』とは全く異なつて、前共産黨員との廣汎なインターヴューを通じて、右の問題を究明していこうとするものである。

だがわれわれとしては、これら二つの書物はいずれ劣らず、事實を忠實に表現しているといいたい。『共産主義のアピール』における數量的測定や表讀みだけが客觀的敍述であると思つてはならない。『過ちし神』における主觀的告白は、人間の内奥の心底を探りあて、われわれ自身に深き反省と洞察力を與えずにはおかないのである。前者は、後者の内容をより一層普遍的なものにし、實證的に掘りさげていつたものといつてよいであろう。

二　共産主義者のモデル理論

先ず『共産主義のアピール』におけるアプローチの仕方について、簡潔に述べておくことが便利である。この研究は、その第一部において、共産主義の教義と黨のコミュニケーション・メディアから、共産主義者および黨の形式的モデルを構成する。第二部では、このモデルが實際にどのように認知されているか、インターヴューのデータによつて、その差異を檢證する。第三部では、共産主義運動に感應しがちなパーソナリティ構造を分析し、第四部において、共産黨への同化過程と脱黨過程を記述していく。

この研究のサンプルに含まれた前共産黨員の數は、全部で二二一名、そのうちアメリカ人六四名、イギリス人五〇名、フランス人五六名、イタリー人五一名。一九三五年以前に入黨していたもの一五六名、それ以後のもの一〇六名。職業・階級別には、一一一名が勞働階級、一一〇名が中産階級（主として知識人）、黨ハイアラキー

の地位別には、五一名がトップ・レヴェル、七三名が中間ないしそれ以下の地位、九七名が最下位の平黨員。そして大部分が、一九四〇年代あるいはそれ以降に、脱黨したものである。この他に、各國の共産黨中央委員會の現役メンバーに關するデータも收集された。さらに、アメリカの精神分析學者より、共産主義者の患者三五の臨床的ケース・ヒストリーの提供を受けた。以上のように、本書の研究は、社會學における調査研究のテクニックに基づいている。方法論的には、データの收集分析、概念と假設の檢證によって、共産主義運動を具體的・動態的に把握しようとするものである。

ここで問題となるのは、脱黨者と現在黨に所屬するものとはその性質が相違しているのではないかという點である。われわれは脱黨過程の分析によって正確な解答を與えられるであろうが、アーモンドによると、兩者には程度の差しか認められず、脱黨者のデータから、黨への牽引と反撥についての假設をひきだすことは妥當であるという。この前提の可否は、さしあたって問わぬことにする。またインターヴューに際しては、應答者はそれを快諾してくれたが、その解答には偏見が逃れ難いので、データの取扱い方については充分の配慮がくばられた。ともかく、この研究が脱黨者の特殊的類型に限定されないように、いろいろと努力が拂われていることは明らかである。

先ず最初に、分析上の道具として、共産主義者のモデルを設定する。どんな政治運動でも、その構成員に對しては、ある行動の標準が與えられている。所屬集團の構成員は、その行動を規制され、强制される。しかし一般的にいって、近代西歐社會には多元的集團が存在し、個人に選擇の自由が許されている。それに反して、共産主義運動においては、そのメンバーシップに對し唯一の明白な規範が與えられ、すべての行動を決定していく方法がとられている。こうした共産主義者の理想的イメージは、マルクス主義の教義に明記されていることはいうまでもない。本來のマルクス主義においては、人間は、經濟的機能集團のメンバーとして行爲するものとして把握され、かつプロレタリアとは、歴史法則と社會過程に關しての充分なる知識を備えている《科學的社會主義者》である、とされている。このような概念は、レーニン主義においては、その革命的戰鬪者としての特徴が强調され、平均的プロレタリアと峻別さるべき《職業的革命家》へと變貌されている。それ故、われわれが共産主義者の肖像を描こうとすれば、レーニン主義・スターリン主義をモデルにするのが最も當を得ている。

アーモンドは、ここに主として、レーニン『何をなすべきか』（一九〇二年）、同『共産主義における「左翼」小兒病』（一九二〇年）、スターリン『ソ同盟共産黨小史』（一九三八年）の三つの古典を選んでいる。そして、そのなかに見出される共産黨および黨員に關するテーマの量的頻度を分析しているが、それには內容分析の方法と信頼度のテストがほどこされている。ところで、右の三つの古典には多くのヴァリエーションが認められる。『何をなすべきか』は共産主義的戰鬪者を全般的に敍述した、最も基本的なものとして知られている。次の『左翼小兒病』は、寧ろ他の政治諸集團との提携をことし、黨に人民戰線的性格を導入したものである。『共産黨史』は共産黨の訓練課題のテキストとなっており、スターリンに

よる例の大追放後に書かれたものである。それらを比較した相違點は後に示されるであろうが、結論的にいうと、以上の古典に描かれた共產主義的戰鬪者とは、何よりも先ず、權力戰術者（power tactician）であるということ、すなわち、彼の行動目標は、全面的に、權力獲得、黨の權力獨占へと指向しているということである。勿論、權力戰術以外の價値、例えば社會主義の實現、勞働時間の短縮、インターナショナルの運動のメンバーといった價値目標にも言及されてはいる。しかしそれは、量的にいつて、極めて僅かなものにしかすぎない。以下に、前掲三書を分析して得られた共產主義者の戰術的諸性質を簡單に記述してみよう。

戰鬪性（Militance）　共產主義者はその課題遂行のために鋼鐵の如く鍛えられ、あらゆる鬪爭技術を身につけていなければならぬ。黨員は共產主義運動の先頭に立つ前衞であり、プロレタリアート獨裁のための武器であらねばならない。黨のリーダーシップは《戰略的・戰術的リーダーシップ》として機能する。共產主義者は、その軍事行動において、物理的暴力を行使するのみならず、敵對者に對しては激しい言語の暴力を用いて攻擊していく必要がある。

合理性（Rationality）　戰鬪性にもまして强調されているテーマは、共產主義者の合理性ということである。彼の究極目標は權力掌握であるからして、知識とか分析の問題は、目的のための手段を適確に評價することに還元される。共產主義者のモデルにとつては、目的と手段とのあいだの對立、良心などは問題とならない。ただし何時の場合でも、權力の得失という觀點に立つて、手段の採擇には大幅の融通性（flexibility）をもたしているのが特徵である。

他方、《革命理論なしには、如何なる革命運動もありえない》というレーニンの命題が示すように、共產主義者には、マルクス・レーニン主義という理論が與えられている。それは科學的・現實的であるとともに、すべての實踐的問題に解決を用意している。それはそれ自身で、歷史の發展を科學的に豫斷するものとされ、黨の政策決定を常に正當化するのである。このように、計算し、分析し、測量し、評價することこそ、共產主義者の行動樣式にみられる最も重要な要素である。設定された目標は不變である。しかしながら、それを達成する戰術は融通自在であつて、狀況への適應形態は多樣に變化する。こうした行動樣式の合理性は極めて冷酷であり徹底的であり、しばしば非人間的ですらある。

組織と規律（Organization and Discipline）　以上の二つの性質が最も重要視されているが、さらに共產主義運動の特徵として、その特殊的な黨組織と嚴格に訓練を受けた忠誠心というものが認められる。黨組織は中央集權化されていて、一枚岩的である。注意すべき點は、共產黨は、合法的にも非合法的にも、その活動を續けていく必要上、陰謀的裝置をも巧みに操作していかねばならない。それ故、優れた共產主義者とは優れた陰謀家のことである。

大衆のリーダーシップ（Leadership of the Mass）　黨は《勞働階級の前衞》であるといわれるが、それは、黨が勞働大衆と密接に結びついていなくてはならないが、決してそれと同一であることを意味していない。黨のリーダーは常にイニシアティヴをとつて、大衆を訓練し、鼓舞し、熱狂を搔きたてる。彼はいわばカリスマ的教師の役割を果すのである。

行動主義（Activism）　共産主義者は間斷なき緊張の中に生活する。彼はあらゆる障碍に出會わされるであろう。それを回避したり遲滯させたりすることは絶對にできない。しかも彼に課された巨大な仕事は決して完成されることはなく、より高次の目標に向つて常に行動するよう强制される。

献身（Dedication）　共産主義者になるということは、强制的義務を受容することである。彼は如何なる犠牲にも耐え、迫害、投獄、追放にあつても、自己の忠誠や決斷を弱めることがあつてはならない。革命を成就するに、危險を伴うことは覺悟の上である。かくて、自己の全存在をあげて黨に献身することは、共産主義者の特性といえよう。

獨自性（Uniqueness）　以上の諸性質はいずれも共産主義者の獨自性を示しているが、とくに、共産黨は《新しい型の黨》として自負されている。彼は選ばれたるものであり、その英雄的行爲に匹敵しうる光榮はないとされる。

確信的態度（Confidence）　共産主義者とは眞に確信をもつた人間である。その確信は、第一に歴史の究極的勝利を約束された理論をもつていること、第二にソ同盟における實際の成功、に依據している。そしてそれは、ロシア革命後は、共産主義の理論的妥當性よりも、ソ同盟の成功とか業績に裏附けられている。現在では、中國や東歐への運動の擴大によつて、世界的規模の不可避的勝利へと、ますます確信の度を深めつつある。

以上の諸性質は、古典において第一表の如く配分されている。これによつて、われわれは共産主義者のモデルにおける戰鬪性と合理性の顯著な性質を明確に知ることができよう。またレーニン主義とスターリン主義との比較では、黨組織と規律の遵守についてみると、『何をなすべきか』および『左翼小兒病』ではそれぞれ一二%と七%であり、『共産黨史』では一六%となつており、同様に合理性についても双方には可成りのひらきが示されている。かかる變化は、スターリンのもとにおける黨のリーダーシップの强化と變質を證據だてているものといえるであろう。

第1表　古典における共産主義者の性質（%）

	何をなすべきか	左翼小兒病	共産黨史
目標性質	1	4	6
戰術的性質			
戰鬪性	22	24	28
合理性	34	35	23
組織	12	7	16
リーダーシップ	16	14	13
行動主義	5	3	3
献身	3	5	3
獨自性	5	3	3
確信的態度	2	5	5
パーセント	100	100	100
總計	801	764	2208

ところで、右のモデル理論は、決して《作用している現實》と同一視することはできない。共産主義の實際の運動において、それはどのように表現されているか、共産主義者自身のあいだにどのようにコミュニケートされているのか。共産主義のマス・アピールを理解するには、黨のコミュニケーションを分析してみなければならな

い。アーモンドの指摘しているように、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの諸著作は、共産主義のコミュニケーションとしては、黨の內面的レヴェルを表象しているにすぎない。そしてさらに、この內的表象には、コミンテルンやコミンフォルムの刊行物によるコミュニケーションをも含んで考察されねばならない。それに對して、黨の外的表象というものが區別されうる。すなわち、『デイリー・ワーカー』とか『ユマニテ』といったような一般的マス・メディアによるものがそれである。アーモンドの言葉によると、共產主義のコミュニケーションには、エソテリック（esoteric）とエクソテリック（exoteric）の區別が設けられるのである。このことは、後述するように、黨への參加の問題に重要な意味をもっている。

第2表　コミンフォルム誌とデイリー・ワーカーにおける比較（%）

	コミンフォルム	デイリー・ワーカー
自己自身への言及	52.1	11.1
對象への言及	18.9	8.6
敵對者への言及	29.0	80.3

したがつて次に、黨の內的表象と外的表象とを具體的に比較檢討してみる必要がある。アーモンドは、前者としてスターリンの先の『共產黨史』、および、一九四八年のコミンフォルム機關誌、『恒久平和と、人民民主主義のために』の論說、後者として同じく一九四八年のアメリカの『デイリー・ワーカー』の論說を四回每に、採用している。先ず、『コミンフォルム』誌と『デイリー・ワーカー』とを比較すると、第二表に示される如くである。*ここにいう自己自身への言及とは、共產主義運動、そのリーダー、それと交渉をもつ諸集團、イデオロギー等を指示し、對象への言及とは、勞働者、農民、大衆、人民等を指示し、敵對者への言及とは、アメリカ政府、資本主義、帝國主義等を指示するものとする。この表において、最も顯著なことは、黨のマス・メディアに關する限りでは、共產主義者自體の行動は目立たないように隱蔽され（一一・一%）、それに反して、敵對者の害惡的性質が派手に誇張されている（八〇・三%）ということである。

＊本稿においては、原書に掲載されているすべての表を引用することは不可能であるので、必要なごく少數に限定せざるをえなかった。したがつて、以下の表の番號も改めてふり直してあるので、原書のそれと必ずしも一致していない。

第3表　コミンフォルム誌とデイリー・ワーカーにおける敵對者への言及の比較（%）

	コミンフォルム	デイリー・ワーカー
アメリカ（行政，立法，司法，政黨，アメリカ帝國主義等）	3.0	39.0
その他の國および地域（西歐諸國，アラブ諸國等）	2.7	5.3
イデオロギー上の敵對者（帝國主義，資本主義，ファシズム，反動等）	16.1	25.7
異端的敵對者（右翼社會主義，自由主義的反逆者等）	4.7	10.3
チトーへの敵對	2.5	—
總計	29.0	80.3

アーモンドは、以上の各項目の內容をさらに細分して記述しているけれども、ここには、敵對者の項目を掲げるにとどめる。第三表は、『コミンフォルム』誌と『デイリー・ワーカ

ー』を比較したものであるが、地方的な敵對者についてみると、後者では四四%以上、前者では六%以下となっており、それぞれの總計において占める比率の差は甚だ大であることが判る。同様に、イデオロギー上の敵對者については、『コミンフォルム』誌の方に、壓倒的に頻度が多い。このデータからすると、共産主義運動への同化過程における最初の段階では、つまり、『デイリー・ワーカー』のレヴェルでは、黨に補充される新しいメンバーは、ある特定地方の敵對者の害悪についての表象によって、非常に強い作用を及ぼされ、やがて現存秩序への彼等の忠誠心が侵害されていく結果となる、と推量される。彼等が新たな忠誠心、共産主義のエソテリックな教義(hagiology and demonology)に接するようになるのは、第二の段階であるように思われる。

この點を一層明瞭にするためには、先に古典を分析した時と同じ範疇を用いて、『コミンフォルム』誌、『デイリー・ワーカー』における共産主義運動自體の性質が如何に描寫されているかを示し、『共産黨史』と比較してみるとよい(第四表參照)。目標性質について、三者の比率の差は明らかである。『デイリー・ワーカー』の二六%は他の二者と比べものにならない。しかもその性質の内容の差異は、それぞれのニュアンスをよくあらわしているのである。『コミンフォルム』誌と『デイリー・ワーカー』では、いずれも自由、平等、平和というようなエクソテリックな目標に強調がおかれているのに對して、『共産黨史』では、黨の權力、プロレタリアート獨裁、社會主義の實現といったエソテリックの目標に強調がおかれている。『デイリー・ワーカー』における目標性質は全くエソテリックでない。戰鬪的性質にしても、『共産黨史』や『コミンフォルム』誌に比べると、その比率の差は九四%と九二%に對する七四%であり、しかもその性質内容は、敵對者の害悪を暴露し、大衆をそれから護衛しようという防禦的・道德的なものであり、攻擊的なものではないことが知られる。

第4表 コミンフォルム，デイリー・ワーカー，共産黨史における共産主義運動の性質(%)

	共産黨史	コミンフォルム	デイリー・ワーカー
目標性質	6	8	26
エソテリック	4	0.5	
エクソテリック	2	7.5	26
戰鬪的性質	94	92	74
戰鬪性	28	25	35
合理性	23	10	2
組織	16	9	3
リーダーシップ	13	19	11
行動主義	3	7	6
獨自性	3	6	1
献身	3	7	13
確信的態度	5	9	3
總計	100	100	100

この點は、これら三者の中で實際に使用されている言語形態を調べることによって、よりはっきりと證明されるのである。黨のコミュニケーション・メディアによる表現形式とか文章構成は、共産主義運動に參加していくものに少なからざる影響力をもつ。これはと

くに、黨が敵對者に對しておこなう煽動的プロパガンダや暴露に示される豐富な語彙や形容句についていえる。アーモンドは、共產主義者の用いるエソテリックとエクソテリックなスタイルを周到に分析しているが、ここには、それらの問題を省略する。

以上のデータから、一應假設的に、次のような結論をうることができる。共產主義運動の表象の仕方には、二つの鮮明なコントラスト、エソテリック・メディアとエクソテリック・メディアを通ずるものが識別されるということ。そして新たに共產黨に參加しようとするものは、黨の內面的教義や實踐に接觸しているのではなく、彼等は入黨後にはじめて、それらを學ぶようになるということ。つまり、先の例でいえば、『デイリー・ワーカー』において表象された共產主義者の行動のパターンにだけ接觸しているものは、共產主義運動が實際にどんなものかを知悉していないということである。彼は、一般化された美德の色褪せたチャンピオンを以て自ら任じ、共產主義イデオロギーの水割りされた見解を受けいれているだけのことである。そこで、この假設を檢證していくために、共產主義運動が、現實において、如何に認知されているかという問題を、以下に考察しなければならない。

三　共產主義運動の現實

I　目標の認知

共產黨のコミュニケーション・メディアの分析によつて、共產主義のアピールは古典的理論と異つていることが明らかにされたが、それにしても共產主義運動が、フォーマルな教義を重大視していることに變りはない。一體、人は、入黨する時、如何なる目標を認知しているのか。應答者のデータによると、入黨當時、共產主義の古典に接觸しているものは、僅かに二七%のみしかない（第一表參照）。あるアメリカ人の例によると、「わたしはマルクスの部厚い本にわずらわされたことはなかつた。わたしが入黨したのは、黨が寡婦の追い立てられた家具を彼女の家に戻してやつている時であつた。わたしはそれが正しいことだと思つた。それが入黨の理由だ」という。このように、古典をまるつきり讀んでいないというのは極端な例に違いないにしても、たとえ讀んでいても、その內容については關心を示さないものが可成りの數にのぼつている。そして大部分（九六%）は煽動的目標（ファシズムとの鬪爭、人種的差別の廢止、帝國主義との鬪爭、あるいは、勞働組合の目的達成、人道主義的社會主義等）のみを認知して、入黨している。したがつて、彼等は入黨する時、黨のマス・メディアにおける表象にひきつけられていて、そのエソテリックな性質については知つていない場合が多いといつて差しつかえない。しかしまた、入黨者は、エ

第1表　各國別にみた入黨時の目標認知　(%)

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
應答者數	64	50	56	51	221
エソテリックな目標への接觸	28	16	46	14	27
煽動的目標の認知	95	100	98	92	96
非政治的認知	73	54	45	55	58

ソテリック、ないしは煽動的目標のみによつて、いわば政治的に黨を認知しているとは限らない。應答者の五八%までが非政治的目的、すなわち、パーソナルな問題を解決する手段として、入黨しているのである。尤もこの場合、全くパーソナルなものだけということは稀で、それには煽動的目標が結合されていることが多い。

國別にみると、アメリカでは七三%が非政治的認知、フランスでは四六%がエソテリックな目標の認知という對照が際立つている。フランス共産黨は、革命的エリートとしてのボリシェヴィキの原理によく合致しているように思われるが、この結果は、フランスの應答者に、共産主義運動の初期に入黨したもの、地位の高いものが不釣合に多かつたためである。こうした政治的目標の認知にも、各國によつてそれぞれ相當な差異がみられる。概して、アメリカとイギリスでは、勞働組合の目的を成就していく手段として、あるいは、一般的な社會改良とか生活の向上を指向するものとして、黨が認知されている場合が多いようである。フランスとイタリーでは、社會主義＝人道主義への憧憬をその傳統に深くもち、そのようなものとして黨を認知している。非政治的目標の認知についてみると、これらの國に共通しているのは、黨を反權威主義的なものと看做していること、反抗の手段として黨が選ばれていること、黨への參加によつて何か刺戟を與えられようとしていること等である。アメリカとイギリスの場合、黨は孤立とか孤獨とかいつたパーソナルな問題を解決してくれる手段として、認知されることが多い。このような傾向は、とくにアメリカに顯著にあらわれているようだが、この點に關しては、アメリカの共産黨員の構成が外國生れのもの、あるいはその次の世代のものが多數を占めているという特殊な事情に照らして、後に社會學的究明がほどこされるであろう。

第二表は、階級別に、目標の認知を比較している。これによると、知識階級と中産階級は勞働階級に比して、古典に多く接觸していること、非政治的目標の認知が壓倒的に多いことが示されている。第三表は、一九三五年を基準にし、前後の時期別に、黨員の目標の認知の差異を示したものである。これによると、人民戰線（ポピュラー・フロント）の結成期を中心として、ソ同盟の戰術轉換に呼應する新黨員の補充が、黨員に大きな性質變化をもたらしていることがわかる。すなわち、前期黨員の三七%が入黨以前から黨の教義に接觸しているのに對して、後期黨員は僅かに一五%がそうである。これはレーニン主

第2表　階級別にみた入黨時の目標の認知（%）

	中産階級	勞働階級	全應答者
應答者數	110	111	221
エソテリックな目標への接觸	32	21	27
煽動的目標の認知	94	99	96
非政治的認知	71	44	58

第3表　時期別にみた入黨時の目標の認知（%）

	前期入黨者	後期入黨者	全應答者
應答者數	115	106	221
エソテリックな目標の認知	37	15	27
煽動的目標の認知	97	96	96
非政治的認知	48	68	58

義のモデルからみると、明らかにイデオロギー上の《純潔さ》が墮落している事實を示唆している。なお、一九二〇年代の黨員は、平和主義、社會主義的人道主義、ソヴェト革命へのロマン的期待、等によつて目標を認知しているのに對して、後期黨員は反ファシズム、生活條件の改善、等によつているという差異が認められる。

＊イタリー共産黨は、一九四三年までは地下組織であつたので、イタリーの場合に限り、この年をもつて入黨の時期的區別とされている。

さらに第四表は、地位別にみた差異である。ここに一般黨員とは何らの役職ももつていないもの、下級黨員とは黨細胞の書記の地位から、ある地域の最も總括的な役職までのもの（ただし、それを含まず）、上級黨員とは黨のある地域的機關、連合體の機關、あるいは國家的機關に役職を有するものである。地位が上昇するにしたがつて、エソテリックな目標と煽動的・非政治的目標の認知の比率が、ちようど逆に增減している。このデータから、前以て黨の教義をよく認知していたものは、黨に參加してから、リーダーシップの地位によりよく進むことができるし、黨への同化にも餘り摩擦がないと推定される。それに反して、非政治的目標、パーソナルな問題の解決のために入黨したものは、低い地位にとどまつており、また在黨期間も短いようである。

第4表　地位別にみた入黨時の目標の認知（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
應答者數	97	73	51	221
エソテリックな目標への接觸	17	30	41	27
煽動的目標の認知	99	96	92	96
非政治的認知	67	59	37	58

かくして得られた歸結は、黨員の大多數が共産主義の教義、黨のエソテリックな性質を、入黨時に知つているのではないということである。彼等はせいぜい、煽動的目標によつて、または非政治的目標に基づいて入黨する。彼等は、入黨後に黨のエソテリックな面に觸れると、餘程異なつた印象を受けとることとなろう。それ故にまた、彼等は教義をどのように學習していくか、また黨自身が彼等をどう教化していくかは重要な問題となるのである。

黨における理論的教化についても、右と同じ方法でアプローチされる。以下には簡單にデータを說明するにとどめる。教化の種類には、ロシアの黨學校、各國あるいは地域の黨學校、地方的な訓練活動、個人教授、獨習、フォーマルな訓練を受けぬもの、が區別される。豫想された通りに、勞働階級の四五%はフォーマルな訓練を受けていない。時期別にみると、教化の仕方が相當違つている。これは、黨學校が大々的に機能しはじめたのは一九三〇年代のことで、前期黨員の多く（四五%）は個人教授によるか獨習によるかして、教義を學んでいつたが、後期黨員（三五%）は黨學校において訓練を受けられるようになつたことによる。また地位別にみると、上級黨員の六%はモスクワのレーニン學校で訓練を受けている。下級・一般黨員ではそれが一%だけであることも、豫想されていた結果である。一般黨員にはフォーマルな訓練を受けていないものの比率が高いけれども、これは當然のことであつて、黨學校の果す機能は、

黨員を教化訓練するとともに、黨のリーダーシップの能力の有無を檢出していくことにあるのであつて、それに入るには嚴重な適格審査がおこなわれる。一般黨員の地位にあるものはそれにふさわしくないわけである。

では、この教化訓練はどのように認知されているであろうか。應答者の殆んどがその苦々しい體驗を語つている。それはある意味で、《教化のせんじ藥》を無理強いに呑まされるようなものである。次は、あるイタリア人が觀察した訓練學校の實狀の一例である。

「このようにして、個人は次第に事實や狀況を客觀的に判斷する能力を失つていく。そして、彼が教化された今となつては、公理としての價値となつた基本的思考樣式を何時も使用し、自分自身の知性によるのではなく、暗記によつてものを思考しはじめる。これらの結果を獲得するのは、單純なことでも容易なことでもない。この外科手術が要求する疲勞と單調とを克服していくには、とりわけ、強い意志力、より正確にいうと、ある種の決意を必要とする。この決意の行爲――それはほんとうは諦めの行爲なのだが――は、討論の指導に示される巧妙な技法で以て容易におこなわれる。」

こうした黨の雰圍氣は、一九二〇年代に訓練を受けたものが、教義に熱心な討論をかわし合い、相對立する見解にも寛容な態度が示されていたという雰圍氣と著しく異なつている。そしてこのことは、とりも直さず、黨のスターリン化の傾向とロシアの偶像視とが、黨をますます權威主義的なものにし、高度に集中化されていつた事實を示している。入黨前に教義に接觸していたものも、そうでないものも、黨内の理論的教化の方法に反發を感ずる。しかし注意すべきことは、共産黨の權威主義的傾向は、本來、古典の理論に内在しているものなのである。とくにスターリンの著作のうちには明記されている。共産主義的戰鬪者の合理性の機能は、黨内の少數指導者層にのみ委ねらるべきものであつて、大多數の黨員は、黨の合理的・理論的側面と知的交渉をもつことなく、ただ忠誠を誓えばよい。

このように、共産主義者の行動樣式における合理性のテーマは、黨生活内に特異な雰圍氣をつくりだしている。應答者は、黨内のメンバーシップに眞の人間關係、友情が缺けており、非人間性と機能的な團結のみが支配していることを認めている。すなわち、人間關係のパターンには、黨内と黨外とのそれに何らの差異もないというもの二九%、分離されていて、政治的に機能しているというもの二〇%、懷疑と不信にいろどられているというもの一五%、一般黨員のあいだでは溫情的であるというもの八%、黨の初期には溫情的であつたけれども、二〇年代後期から三〇年代にかけてのスターリン化に伴つて變つてしまつたというもの八%、その他となつている。あるイタリー人は次のように指摘している、「黨の教義は友情というものを認めない。個々人をつなぎ合わすのは人間的な感情であろうものを、彼等は正常な人間であろうとはせず、何はさておき共産主義者であらねばならないというのだ。また友情は、同志相互の注意深い監視とも相容れない。それ故共産主義者は、自分の思想と内心の意見を守るべく自らを隔離して、自己自身のうちに隱遁しようとする」と。その他の例でも、黨を離れて人間的になつたとか、在黨時は乞食の前を平氣で通れたが、今では氣にかかつてならない、と

かという解答がよせられているが、いずれも、黨内部の異常な人間關係を證示している。國別にみると、黨の内部と外部に特別な差異がないというイギリスの五二%は、イギリス共産黨の特質を示し、かつ黨の教義的モデルとは最も偏差している事實を示している。中産階級と勞働階級のあいだには、餘り重要な差異は認められない。時期別にみると、矢張り前期の黨員が初期の黨をより溫情的であつたといつている。地位別にみると、上級黨員には、人間關係を教義に適切なモデルによつて認知しているものが多く、したがつて、非人間的であることを餘り意に介しない。

以上の事實は、黨のモデルの合理性が現實にはうまく機能していないことを證明している。黨生活が黨員に要請する非人間的忠誠心は、とくに下位の黨員間に徹底化されていない。彼等は依然として感傷的であり、黨の外側の一般社會との人間關係を保とうとし、多樣な利害關係を拔けきつていないのである。だが、一たび合理性と非人間性のモデルが完遂されると、そこには却つて、敵對心と恐怖感の雰圍氣が釀しだされ、個人は感情の抑壓と自己自身への逃避を餘儀なくされる結果を招いてしまう事實は明らかにされている。

Ⅱ　戰術的側面の認知

次に、共産主義者のモデルやコミュニケーション・メディアのイメージにおける戰術的性質が、入黨に際して、どれほど刻明に印象づけられているかを考察してみよう。

戰鬪性　インターヴューでは、應答者は戰鬪性について直接問われたのではなく、黨の敵對者に對するネガティヴな態度について、任意に記述していく方法がとられている。すでに述べたように、『デイリー・ワーカー』では、敵對者の害惡を強調する傾向がみられ、入黨者はそれを認知するよう仕向けられていた。このような敵對者に對する憎惡という情緒的傾向は、黨において、どんな役割を果しているのか。先ずこの問題を究明してみる。次のアメリカの應答者の見解は、この點についてきわめてよい參考になろう。「わたしの意見によると、共産主義運動のアピールがかくも強烈であり、滲透しており、かつ正當であるとされる理由は、そのアピールの九九%が共産主義とは無關係であるということだ。……共産主義のプロパガンダの九九%が攻擊的であり批判的である。現狀には批判すべきものが澤山あるから、そのプロパガンダが効果をあげざるをえない。……共産主義のプロパガンダが現狀の缺陷を強調すればするほど、それは、あらゆるタイプのほんとの苦情をもつた人々を味方に引き入れることができる。プロパガンダは何物かに對しているのであつて、何物かのためにあるのではない。後になつて、人が黨を離れるようになるのは、何物かに對している彼等の欲求が滿足させられても、何ものかのための彼等の欲求が滿足させられないからである」。

とくにアメリカとイギリスの應答者には、黨生活の情緒的傾向に憎惡が重要な役割を果していたかどうかが問われている。アメリカでは四一%、イギリスでは二八%が、非常に重要であると答えている。重要でないというものはそれぞれ、五%と八%にすぎない。このように、人々をして憎惡へと驅りたてることは、黨を恒常的な緊張狀態に保たせることとなる。實際、憎まなくては闘えないからで

第1表 階級別にみた黨の憎惡の對象（%）

	中產階級	勞働階級	全應答者
穩健左派	15	28	21
勞働組合	4	3	3
異端者	15	6	11
保守派	8	11	10
資本主義	26	26	26
ファシズム	14	15	15
アメリカ合衆國	5	4	4
その他	16	20	18
解答なし	34	40	38

第2表 地位別にみた黨の憎惡の對象（%）

	一般黨員	上級黨員	全應答者
穩健左派	17	41	21
勞働組合	3	4	3
異端者	11	14	11
保守派	10	8	10
資本主義	20	28	26
ファシズム	10	29	15
アメリカ合衆國	5	4	4
その他	18	14	18
解答なし	44	31	38

（いずれも複數解答）

ある。しかし、自分が憎むというよりは、黨が逆に、そのメンバーに對して外界から憎まれているのだという脅迫の感情をうえつけていく場合もあることを、注意しなければならない。つまり、あるアメリカ人がいつているように、「わたしはそれを憎惡とは呼びたくない。だが差別があるのだという感じ、敵意の對象となつているという感じが育てられ」ていくのである。さらに、憎惡の强調の程度は、上級黨員に顯著に示されているのも特徴的な點である。

憎惡の向けられる對象の種類は、各國によつてさまざまである。例えば、イタリーでは、カトリック教會が頻繁にあらわれているが、フランスでは少なく、アメリカ、イギリスでは殆んどない。これらの國に共通して最も頻度が多くあらわれる對象は、《資本主義》、《ファシズム》、《右翼社會主義》、黨の《異端者》というようなイデオロギー上の基準標的である。第一・二表は敵意の對象を、階級および地位別にみたものである。穩健左派に對する態度は、中產階級の一五%、勞働階級の二八%である。黨の異端者に對する態度は、それぞれ一五%と六%となつている。これらの差異は各階級に固有な問題と關連している。つまり、勞働階級の應答者は勞働組合運動に參加しているものが多く、左派の組合指導者は彼等の主たる競爭相手にほかならない。異端者や脫黨者は中產階級のものに高い比率を占め、したがつてそれに對する危險性が、中產階級により鋭く意識される所以である。同じく穩健左派に對する態度を地位別に比較すると、上級黨員の方が一般黨員より遙かにパーセンテージが高い（四一%對一七%）。これは、《右翼社會主義的追從者》に對する黨內部組織の特別な敵對關係を示すものである。

右のデータ分析においては、黨の敵對者への言及の頻度のみしか指示されておらず、その質的强度の差異が明瞭でない。しかしこの點についても、以上から敵對心とか憎惡は、黨に最も近接した對象に關して最も大であるということが示唆されている。あるイタリーの上級黨員は次のように述べている。「コミンテルンは外國列强よりもトロッキーを憎んでいた。コミンフォルムはアメリカよりもチトーを害敵と看做している。イタリー共產黨の指導者層はデ・ガスペリやローマ教皇よりマニヤーニやチュッキを恐れ憎んでいる、と

わたしは確信する」と。

組織とリーダーシップ　共産黨の組織や規律が權威主義的であることは前記の通りであるが、同時に黨の教義は、黨組織を《民主的中央集權制》と規定している。この概念は、簡單にいえば、黨の決定は下部レヴェルで討議され、上部機關に報告され、そこで最終決定が下される。そしてそれは、黨全體に完全な拘束力をもつこととなる。また、黨機關も下から上へと選擧手續によつて、選出されるというのである。しかしながら、政策決定にせよ、黨指導者の選擧にせよ、實際の黨には一切の民主的要素が存在してないということは、インターヴューのデータに明白に反映している。黨組織を民主的であると述べたものは、全應答者の二%だけであり、その六三%は權威主義的であると述べている。階級別には重要な差異が認められないが、時期別にみると、前期黨員は初期には民主的であつたが、後に權威主義的になつたというものが多く、彼等はこのボリシェヴィキ化の時期を通じて黨にとどまり、黨のリーダーシップの地位についたのである。

このように、黨を權威主義的であると認知することには、また黨のリーダーシップにあるものの性質、および各人が黨ハイアラキーの階梯を上昇するにつれて生ずる性質の變化に關して、特殊な印象が反映されているとみることができる。如何なる種類のものが黨のリーダーたり得るかは、第三表に示される如くである。黨のリーダーシップの地位に昇進するには、黨に忠誠であり、服從するような性質が最も有力である。知性や能力も必要であるのは勿論だが、それは「命令を仕遂げるに充分な知性」ではあつても、「命令に質問を發するに充分な知性」でない方がよいといわれる。その他、古典の素養を身につけていること、政治的な操作技術等がリーダーの性質として認知されている。これらの點は、地位別にみると、上級黨員と一般黨員とでは著しい差があらわれている。これによつても、彼等が、最初はいわば無垢な徒弟時代から階梯を昇りつめていくにつれ、黨内部の諸壓力に耐えうる態度と行動樣式を次第につくり上げ、共產主義者に獨特な性質を身につけるようになることが明瞭であろう。では、如何なる性質の變化がみられるか（第四表參照）。「彼等は多くの物事について無情になり、皮肉になり、辛辣になる。辛辣というのは、よき

第3表　リーダーとして選出される人物の性質（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
忠誠であり服從するもの	56	54	32	59	50
率先して仕事をするもの	38	46	29	10	31
人氣のある人物	16	14	2	4	9
知性と能力のあるもの	14	22	11	8	14
古典に素養のあるもの	27	12	18	22	20
先任權をもつもの	8	2	36	16	7
野心的なもの	14	10	2	2	7
技能ある政治家	11	6	29	8	14
その他	5	8	20	10	10
解答なし	13	12	30	12	17

（複數解答）

第4表　地位の上昇にともなうリーダーの性質變化（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
冷酷になる	34	26	32	22	29
皮肉になる	16	8	5	12	10
疎隔になる	20	20	13	51	25
ユーモアでなくなる	5	—	—	—	1
獨斷的になる	13	10	7	2	8
日和見的になる	17	4	5	4	8
利己主義になる	6	2	9	6	6
專横になる	9	6	14	10	10
見識が多くなる	2	2	5	—	3
より有能になる	—	2	—	—	1
その他	16	6	4	4	8
變化しない	—	4	13	—	4
解答なし	31	44	38	29	35

（複數解答）

黨員たるためにはあなたは生活の機微をも放棄しなくてはならないのだから。あなたは家族をもつていることを忘れなくてはならない――家族に割く時間などないのです。假りにあなたが、物事を全體的にするような組織のメンバーであるとすると、あなたは、ほんの僅かの逸脱、たとえ冗談であつても、あなたの最良の友があなたを曝きはせぬかと絶えず監視していけなればなりません……」。これは、アメリカのある婦人黨員の報告による。なお、第四表の《疎隔》という表現は、しばしば一般黨員の用いる言葉であり、黨のリーダーがエソテリックな神祕性を帶びていること、一般的には、黨の中央集權化、官僚化の傾向をいい當てているものと看做しうる。

行動主義　黨の行動主義の側面は、殆んどの應答者によつて認知されている。應答者の四九%は職員（黨機關、ないしは黨の統制のもとにある組織のいずれかで、給料を受けていたもの）であつた。その一人のイギリスの黨員の例では、一日十八時間、週七日間、合計一週八〇から一〇〇時間を、黨務に從事していたことが報告されている。そうでないもののうちで、餘暇を全部費していたもの一六%、餘暇の大半を費していたもの一六%、幾らかの餘暇を費していたもの一〇%、非常に僅かしか費さなかつたもの五%という割合になつている。黨務に沒頭する時間は、各人その地位に應じて相違するのは當然のことで、職員のうちで上級黨員の九四%、下級黨員の四八%、一般黨員の二六%が全時間を仕事に捧げている。僅かの時間しか費していないとか、全く費さないというものは、上級黨員には皆無である。しかも《非職員》である黨員にしても、その仕事のノルマは普通以上に高いし、一週に四晩か五晩は、黨の集會や仕事のために費さざるをえないといわれる。

献身　このように、黨員生活は、全黨員に對して、常にそのメンバーシップであることの意識を失わないよう强要する。黨員は、ひたむきに黨に献身しなければならない。たとえくつろいでいる場合、休養をとるという時でも、必ず他の黨員と一緒でなければならないとされる。だが、黨員自身も敢て獨りになりたがらないという。あるアメリカの應答者が告げているように、一週間も仕事を離

れてみたいと誰でも念願していながら、いざとなるとすぐ戻ってきてしまう。もし半日でも自由時間が與えられると、黨員は他の黨員を探しまわって、彼とともにすごす、という奇妙な習性がついてしまっている。

上級黨員は休暇をとるようなことは稀れであるけれども、その反面、彼等はいろいろな特權を享受することができる。彼等はまた、性の問題についても、黨の有効な機能的はたらきのために從屬させ、戀愛などというものはブルジョワ的センティメンタルであるとして拒否する。「黨員、特に、黨指導者の機能は、黨員すべてに重要な關係をもっている。それ故、もし誰でも女を欲すれば、誰かが進んで身を委せなくてはならない、というような教義がある」と、あるイギリス人はいっている。尤も最近では、黨内のこうした性的放縱の生活は禁止するよう努力がなされているようであるが。

同樣に、黨員の家族や交友關係も黨の機能に從屬させられている。黨と家族とのあいだに起る葛藤のパターンにはいろいろあり、家族に對する態度も、各國によって異なっている。イギリスでは、黨が優先するというもの二〇%に對して、何等の態度も表明されていないというもの五八%となっており、教義上のモデルに最もふさわしくない。また地位によっても異なるが、一般黨員には、家族關係をよく保つことが奬勵されている。交友關係についてみると、《黨員》と《非黨員》との交際について、とくに例外的な場合、すなわち、異端者との交際を除いて、黨は明確な指令を下していない。全般的には、外部のものと接觸することは、新黨員を補充していく目的からも、促進されているほどである。しかしながら、すでに性質の變化のところでみたように、黨員のトップ・レヴェルにあるものほど、友情や外部との接觸能力が低下する傾向にある。上級黨員は、外部の一般の人々と分ち得ない知られざる領域（terra incognita）をもち、お互い同志の符牒で議論し合う以外には、何らの社交をも好まない。それに反して、一般黨員は、外部との交友關係を多く保っていることは不思議ではない。兩者の交友關係を比較すると、全く黨内のみの人間關係に限られているものは、一般黨員の六%と上級黨員の三一%、殆んど黨内に限られているものは、それぞれ一八%と一六%（以上の合計二四%對四七%）である。外部との多くの交友關係を保っているものは、一般黨員の三九%と上級黨員の二五%であるが、大部分外部との交友關係を保っているものは、一般黨員の一四%に對して、上級黨員は皆無（合計五三%對二五%）である。なお、國別にみると、アメリカの黨員に、外部との交際が缺けていることが示されているが、これはアメリカ共産黨の人種的・外國人的特徴に基づくもので、その理由は後に説明されよう。

獨自性　應答者に對しては、黨のメンバーシップが彼等に特別な優越性を與えているかどうかは問われなかったが、その約三分の一は、共産主義運動のアピールについてそのような言葉を記している。しかもそれは、一般黨員より上級黨員に多く（二一%對三九%）、勞働階級より知識階級に《エリート》意識が目立っていることが注目される。

確信的態度　各國における共産主義の未來への確信は、第六表に示されている。應答者の一三%しか、各國での勝利に確信をもっているものはいない。しかもそれはアメリカとイギリスに多く、フ

第5表　共産主義の未來への確信的態度（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
歴史的不可避性	14	26	25	23	22
必勝への確實な理由	9	8	11	12	10
マルクス主義の診斷の正確さ	31	34	14	18	24
資本主義體制の衰退	34	38	9	6	22
ソ同盟の實例	23	8	13	8	14
共産主義の不斷の擴張	13	12	7	10	10
組織の團結と信念	—	6	13	12	8
自國での勝利を確信しない	17	22	5	8	13
その他	5	4	4	2	4
解答なし	13	4	38	41	24

（複數解答）

その後の發展についてもしばしば言及されている。アメリカの應答者にそのパーセンテージが高いのは、ロシア生れのものが多數含まれていたからである。確信的態度を知識階級と勞働階級とで比較すランスとイタリーが黨組織の團結と信念に確信の基礎をおいているのとよい對照をなしている。このことは、それぞれの國における共産黨の權力と規模の狀態を反映していて、甚だ興味深い。歴史的不可避性、マルクス主義の診斷の正確さ、それらと密接な關連を有する資本主義體制の腐敗沒落、等も可成り頻繁にあらわれている。ロシア革命のミスティーク、ソヴェトの

ると、前者は史的唯物論に確信をおいているに對して、後者はマルクス主義の經濟的不況とか資本主義の沒落についての診斷に經驗的證據を見出し、極めてプラグマティックな判斷に基づいていることが判る。同樣に、時期別には、前期黨員がより歴史的辨證法に強く印象を受け、かつソ同盟の權力掌握に確信をおいているが、後期黨員は東歐や中國への共産主義の進出に確信をおいている。地位別には、教化の度合とも相俟つて、上級黨員は、低位のものに比べて、マルクス主義的な知的構造を以て思考し、したがつて、よりオプティミスティックであることが知られる。

以上のデータ分析から、共産主義の教義と實踐が、現實の運動において、どのように對應し、また偏差しているかが明らかにされた。次に、これまでの敍述を整理補足しながら、要約しておきたい。

教義と實踐との最大の差異は、合理性と組織との領域にみられた。レーニンによつて定式化された革命的エリート概念が、そのまま現實に適應されることは所詮無理であるにしても、新黨員は共産主義の教義に接觸していることが殆んどなかつた。彼等は、煽動的目標によつて漠然たる政治的期待を抱くか、もしくは、たかだかパーソナルな問題を解決する手段として、入黨している。このような《異質的》資料から共産主義者というものを造りあげていくために、黨は嚴格なる教化訓練をおこなつていかねばならない。しかもそこでは、實際には、合理的計算という行動樣式を訓練することよりか、寧ろ黨の權威主義的監視のもとになされる教義の單純な反覆教授法

が採用せられ、黨員の自動的同調性をつくりだしていくことが目的とされている。かくて黨員に對しては、黨の決定を迅速、かつ從順に受け入れていく技能のみか必要とされ、黨組織の民主的集中制の定式は、現實には何ら適應されていないことが明白にされた。

黨のリーダーシップの領域においては、本來その理想としては、共產主義指導者がその《教義上の純潔》さによつて、プロレタリアートを指導していく筈のものを、およそ同志的・同胞的感情もなく、黨によるプロレタリアートの操作という原理が支配する結果を生し、しかも、リーダーシップの各層、指導者層と平黨員とのあいだには、疎隔と距離を生ぜしめている。献身的態度の領域もより一層深刻な問題を含んでいた。家族、休養、交友關係までも、あげて黨の犧牲に供され、かつ大衆との遊離がますます甚だしくなりつつある事態は覆うべくもない。他方、戰鬪性と行動主義の領域では、他の領域におけるほどに、教義と實踐との差異は重大な問題を含んでいるとは思われないが、共產主義の教義が要請するところは、他の諸集團における戰鬪性や行動主義に比べて、より過重であることには違いない。けれども他方で、黨への參加自體が、未來を繼承するもののエリート意識に支えられていることも否定できない。

かくて、古典を通じて黨へ參加したものは、共產主義運動において作用している理想は、ただ單に道具的役割にしかすぎないことを察知するに至る。彼等は深刻な衝撃を蒙らざるをえない。また多くの新黨員、大衆から補充されたものは、あらかじめ、エソテリックな黨の教義に接觸しておらず、入黨後に黨の權威主義的裝置によつて教化されることとなる。いずれにしても、彼等は黨の行動樣式に反撥していく。しかしその度合は、入黨時に彼等がもつていた期待、その突きあたつた衝撃如何んによつて異なるであろう。そしてこれは、各國、階級、時期、地位によつても、決して一定したパターンを示しているわけではない。

國別の差異　アメリカ共產黨のもつ重要な問題は、その構成メンバーが外國生れのもの、あるいはその次世代のものが多いということである。この問題は、後述するように、アメリカにおける文化變容（acculturation）の過程として考察されねばならない。というのは、アメリカの黨の異常な雰圍氣——自我の崩壞、疎獨感、强度の敵意——は、人種的なものに起因していると考えられるからである。イギリス共產黨も黨のモデルとは著しく異つたパターンである。黨員間の關係は、黨の外側の人間關係と餘り差異がなく、指導者層と平黨員との關係も緩やかである。また、敵對者に對する憎惡もそれほど强いものではない。イタリー共產黨は極めて大世帶であり、しかもその大部分が、入黨時にも黨内においても、フォーマルな教化を受けていない。數の上では西歐で最大の黨であつても、實際には、最も統合されてなく、教化もされていない黨である。イタリー共產黨は、地下組織や抵抗運動の當時から解放後の時期にかけて、その性格を官僚的權威主義へと大きく變化させた。それ故に多くの黨員は、初期の黨が民主的であり、溫情的であつたと感じている。またイタリーの黨員は、他の國のものより、黨外部との關係を最も多く保持している。フランス共產黨は、西歐のうちで、最もよく教化され、献身的な戰鬪者から成つている。しかし過去十五年のあいだに、やはり大量の黨員が加入し、そのため他の三國に比し

て、先任權と政治的技倆が最も重視されていることは注目に價する。フランスの黨員も外部とよく結びついていることが示されるが、それとともに指導者層と平黨員とのあいだも緊密な關係にある。フランス共産黨は組織力が最も強く、最も凝集力があるといえる。

時期による差異　ドイツ・イタリーのファシズムと日本帝國主義の脅威を受けて、ソ同盟が反ファシスト諸國との提携政策に切換えたことは、共産主義インタナショナル、各國共産主義運動の動向に、少なからざる反應をひき起した。一九三五年の人民戰線以前の時期は、左傾的・革命的であったが、それ以後の時期は右傾的・穩健的になった。これに對應して、共産黨員の行動樣式にも相當な差異が認められる。教義上のモデルから測定すると、前期黨員は後期黨員よりも、よくそれに適合している。そしてまた彼等は、二〇年代末期から三〇年初期にかけての黨の《スターリン化》の體驗を經ており、黨内の雰圍氣が權威主義的に變化した事實を指摘している。兩者の差異は、脱黨の問題にも關係をもっている。すなわち、後期黨員は容易に脱黨し、しかも教義上の理由にこだわらない。それに對して、前期黨員は教義と現實との齟齬を見出し、脱黨理由を教義上で正當化し、あるものはしばしば離脱後も、黨と抗爭しつつ運動を支持しているほどである。

階級による差異　中産階級・知識階級と勞働階級との主要な差異は、教化の度合と認知の範圍とに關係する。勞働階級は、入黨以前に、あるいは黨内においても、フォーマルな教化を受ける場合が少ない。彼等の黨への接近は、プラグマティックであり、現實指向的である。中産階級はそれと反對に、黨の教義により多く接觸している。同時に彼等は、複雜な價値や期待をもって黨に接近し、したがってそれが、黨内での同化過程にいろいろと障害をきたすこととなり、彼等の地位の不安定性という特徴を示唆しているものと思われる。勞働階級はこの點、黨の教義などに比較的わずらわされることがないばかりか、逸脱や反撥もいたって少い。

地位による差異　上級黨員は、入黨時に、教義によく接觸し、パーソナルな情緒性をもつことが少ない。彼等は活動的であり、献身的であることが示さる。しかし、黨のハイアラキーの上層においては、黨リーダーシップが苛酷であり、無慈悲であるといわれる。上級黨員は黨内の幾多の變革をつぶさに體驗してきて、黨の教義と實踐との差異を指摘しているものが多い。

黨が認知されるこうした差異は、さらに深層において、各人のパーソナリティや欲求充足の問題と關連している。共産主義のアピールは、場所によっても、集團によっても、時期によってもそれぞれ異った意味をもっていたが、われわれは、それがまた、異った狀況におかれた多樣なパーソナリティ類型によっても、いろいろと受けとり方が違うことを知らねばならない。共産主義のアピールは決して單數ではなく、複數なのである。次に、共産主義者の社會・心理的特徴を踏査して、共産主義者のタイプをより明確に把握してみたい。

四　共産主義者の社會・心理的特徴

I　社會的特徴

出身階層　共産主義への感應性をただ單純に經濟的貧困の結果に歸することは、正確さを缺いた意見である。應答者の中には、極端な貧困の家庭に育つたものもいるが、決してそれが典型的であるとはいいきれない。そこで、應答者の社會・經濟的背景を調査してみなければならないのであるが、兩親の收入面（これは客觀的な收入指數にではなく、個人的な評價に基づいたものである）から、第一表の如く、階層を區別してみる。これによると、中産階級出身の黨員は、ほぼ中流層の家庭を背景としていることが判る。勞働階級では、中流・下流層が殆んど同じ割合である。上流および貧困層のものは、中産階級と勞働階級にそれぞれごく少數の比率を示しているにすぎない。時期別にみると、後期黨員は前期黨員よりも、上流・中流層のものが多く、貧困層のものは少ない。

第1表　階級別にみた收入上の階層（%）

	中産階級	勞働階級	全應答者
上流層	14	—	7
中流層	64	40	52
下流層	19	41	30
貧困層	3	16	10
わからない	—	3	1
總計	100	100	100

第2表　地位別にみた收入上の階層（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
上流層	8	10	2	7
中流層	44	46	74	52
下流層	43	29	8	30
貧困層	3	14	16	10
わからない	2	1	—	1
總計	100	100	100	100

しかし前期黨員にしても、中流・下流層のものが壓倒的に多いことは變らない。第二表は地位別にみたものであるが、一般黨員の殆んどが中流・下流層に屬しているのに對して、上級黨員は中流層に七四%という集中的な比率を占めている。また、上級黨員には貧困層のものが可成り高い率を示している。下級黨員は、この二つの傾向の中間に位置づけられるとみてよい。こうした比率配分の型は、重要な意味を含んでいるように思われる。すなわち、下流層の家庭的背景にあつたものは、中流層のものより、黨の指導的地位になりに

第3表　地位別にみた入黨時の職業（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
未熟練勞働者	8	17	18	13
農場勞働者	1	—	2	1
熟練勞働者	22	23	31	24
職長，下級管理者	4	1	8	4
ホワイト・カラー	6	6	8	6
小企業者	—	—	4	1
學生	27	26	10	23
專門職	23	23	17	22
その他	9	4	2	6
わからない	—	—	—	—
總計	100	100	100	100

くいということ、そして最下級の貧困階層にあつたものは、却つて、トップ・レヴェルに昇進する可能性があるということが示唆されている。

入黨時の職業　次に、入黨時の職業上の區別について考察を加えると、主要なグループは、熟練勞働者（二四%）、專門職、特にジャーナリズム關係や教職員（二二%）、學生（二三%）、未熟練勞働者（一三%）、ホワイト・カラー（六%）等である。第三表によると、學生とか專門職のものは黨内で低地位にあり、熟練・未熟練勞働者がトップ・リーダーとなつている。全般的にみて、黨においては、勞働階級の黨員に對して、中產階級の黨員よりも、前途が開けているようである。ちなみに、應答者の上級黨員であつたものと現在の黨中央委員會のメンバーとの職業構成を比較してみると、第四表に示される如くである。かくて、黨リーダーシップの構成上からは、應答者と現役メンバーとでは大差ないことが明らかである。

第4表　上級黨員の應答者の現黨中央委員の職業構成の比較（%）

	上級黨員	中央委員
勞働者	59	49
ホワイト・カラー	8	14
小企業者	4	6
學生，專門職	27	31
その他	2	—
總計	100	100

教育　教育の機會は出身階層と結びついているのみか、それは、各國、時期、階級によつても異なる。ここには、地位別にみた教育程度の比較の表を掲げておく（第五表參照）。ここで、大學教育を受けたものが一般黨員に多く、初等教育水準のものは上級黨員の地位に比較的多く昇進していることが注目される（このことは現在の黨中央委員會メンバーについても同樣である）。この事實には幾つかの理由が指摘される。高等教育を受けたものにとつては、黨のほかにもよりよい職業の機會を得ることが可能であるし、しばしば自分の社會的地位や收入の犠牲をも伴つているのに對し、上級黨員のうちで教育のないものにとつては、黨の履歴こそまたとない機會として受け入れられている。さらには、高等教育を受けたものは、西歐の知的・文化的傳統に接していて、そのことが却つて彼等の黨への同化過程に困難を生ぜしめがちである。それに對して、教育のないものは黨の教化に知的抵抗を試みる偏見がより少ない。

第5表　地位別にみた教育程度（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
全然なし	1	—	2	1
初等教育	25	21	49	29
中等教育	25	41	18	28
高等教育	46	37	31	40
わからない	3	1	—	2
總計	100	100	100	100

社會變動　社會變動が齎す不滿が急進的社會運動と深い關連をもつていることは、ファシズムに關する研究等でも證明されているところである。共產主義運動に關しても、それは興味あるテーマである。社會變動を規定する方法は種々あろうが、先ず、應答者が入黨時に保持していた社會・經濟的地位というものを、彼等の兩親のそれと對比して、そこに如何なる變化が認められているかを調べてみた。各國により、また階級によつても差のあることは勿論である

が、應答者の二三%は寧ろよくなつているといい、悪くなつたというものは一六%にすぎず、その六一%は別段の變化なしとしている。これらのデータが示唆するように入黨者の社會的地位の没落は大した原因となつていないように思われる。しかしながら、各人の履歴、前途の見透しに對する滿足不滿足の問題は、兩親の地位との比較が基準とされるよりかは、彼自身の職業に對する希望とか憧憬、その他の狀況における期待との喰い違いにより深い關係をもつているものである。かかる基準からすると（應答者は、入黨時に、大多數は就職していた）、國別にみて、自分の履歴に滿足していたもの一五%、不滿であつたもの二九%、關係ないというもの五六%という比率で示されている。なお、アメリカでは四〇%が不滿であると答えているが、それは、入黨者の半數が不況期に入黨したものであつたがためである。イタリーでは六六%が關係ないと答えているが、それは、多數のものがファシスムの崩壞、ドイツによるイタリー北部の占領という事態に直面して、入黨したからである。階級別にみると（第六表參照）、やはり、勞働階級に不滿なものが多く（四〇%）、それが入黨動機の要因としてはたらいていることは見逃がしえない。他方中產階級にとつては、履歴そのものは入黨と餘り關係がなさそうである（六四%）。時期別には、前期黨員と後期黨員に重要な差異は認められていない。

第6表　階級別にみた履歴への憧憬と期待との差異（%）

	中產階級	勞働階級	全應答者
滿足していた	17	13	15
不滿であつた	19	40	29
關係ない	64	47	56
總計	100	100	100

さらに、政治的・經濟的な外的事件が、個人の履歴、前途への見透しに甚大な被害を與え、個人、ないし家族の體驗に癒し難き傷跡をとどめてしまうことがある。戰爭、不況、ファシズム等によつて蒙つた苦惱や傷手は、往々にして、入黨の決意を促がす。應答者のうちにも、こうした社會的狀況による被災を報告しているものが可成り多い。勞働階級の六一%、中產階級の四二%がパーソナルな不滿をこうしたものに歸し、それが入黨への强い動機づけとなつていることを示している。また注意すべきことは、地位別にみると、上級黨員ほど、狀況による被害をアキュートに體驗していることである（一般黨員の三九%に對して六七%）。この場合彼等は、共產主義のいう《資本主義の危機》、《帝國主義戰爭》、《ブルジョワジーによるプロレタリアートの抑壓》等々の理論によつて、自己のおかれた狀況を解釋し、したがつて彼等の入黨行爲は確固たる政治的動機に基づいているものと考えてよい。

人種的特徵　共產主義運動において、人種問題を取上げる必要のあるのは、アメリカ共產黨の場合だけである。アメリカ共產黨は現在でも、その二七%が外國人であつて、しかも彼等は殆んどが東歐からの移住者であり、アメリカへくる以前に何らかのかたちで革命運動に從事していたものである。彼等の場合には、共產黨に入黨することは、同國人の共同社會における政治的パターンに同調することにほかならない。より一層複雜な問題は、外國人の兩親からアメリカで生まれた世代（いわゆる二世）が入黨するという場合であ

第7表　國別にみた人種構成（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
兩親自國人，自國生れ	20	80	85	100	69
兩親の一方が外國人，自國生れ	11	10	4	—	6
兩親とも外國人，自國生れ	25	10	4	—	10
外國人	27	—	—	—	10
黒人	11	—	—	—	3
わからない	6	—	—	—	2
總計	100	100	100	100	

る。かかる傾向は、彼等をして、その隣人關係において、不可避的に孤獨感を體驗させ、かつ自分が拒否されているという感情、自分自身が無價値なものだという感情を抱かせていき、結局は、彼等の家族とかアメリカ文化に對する激しい敵意、怨恨を誘發せしめる結果を招く。勿論、こうした感情の深度には個人差がある。しかしこのような點からみると、黨への參加が、彼等にとつて、安定した意識と權威とを與え、その孤獨感や疎外感を一時的にもせよ、解消するに役立つていることは疑いない。

宗教的特徴　最後に、應答者の宗教的背景を調査してみる。第八表によると、共産主義への感應性は、非宗教的家庭に育つたものに多いということは、必ずしも正しくない。寧ろ大抵は、宗教的に敬虔であるか、もしくは宗教的傳統や儀式を遵守している家庭のものが多いことが明らかにされている。しかしながら、應答者が入黨する時の宗教的態度と比較してみると、彼等はその成長期に、次第に宗教的感情を失い、入黨する前にはすでにそれを拒否するようになつていることが知られる。かくて、宗教的感情の衰退の結果を、直ちに共産主義への感應性として解釋することは不可能であるにしても、それが宗教的紐帶の損失と何らかの方法で關連しあつているということには、疑問の餘地がないようである。

第8表　入黨者と兩親の宗教的態度（%）

	兩親	入黨者
敬虔的である	23	2
遵守している	20	13
無關心である	13	28
反宗教的である	11	34
その他	1	—
わからない	32	23
總計	100	100

Ⅱ　政治的特徴

年齢　共産主義運動に參加するものは、一體どんな年齢層より成るかという問題には、特別な關心が拂われねばならない。というのは、共産主義運動は、他の全體主義運動と同様に、若い世代には

たらきかけることをその政治的特徴としているからである。ところで、インターヴュー當時、應答者は五〇歳代から六〇歳代のものが多く、彼等の青年時代には、未だ共産主義運動がおこなわれておらず、後になつて共産黨に移行した急進的政治運動の組織に身を投じていた。それ故ここでは、彼等が最初に關係した急進活動の時期を以て、時點を定めることにする。階級別にみると、中産階級と勞働階級では、概して、差が認められない（第一表參照）。この比較においては、例えば、中産階級出身の大學生は在學時代に黨に參加し、卒業後に黨を去るというような、年齢と在黨年限との關係が不明瞭である。そこで第二・三表は、この關係を勞働階級と中産階級との比較によつて、明らかにしている。かくて、勞働階級では、早くから急進活動に參加したものほど在黨年限が長く、兩階級ともその年齢の遲いものほど短いことが指摘される。（例えば十六歳以前のものでは、十一年以上の在黨期間は、中産階級の一四％に對して勞働階級の五〇％。二三歳以上のものでは、十一年以上は同じく一九％に對する四％である。五年以下はそれぞれの階級で、五五％に對する七五％である。）さらに、地位別の表は省略するが、その顯著な特徴は、早い頃に急進活動に參加したものが、やはり黨内で上位へ昇進するチャンスにめぐまれていることである。

第1表　階級別にみた急進活動への參加年齢（％）

	中産階級	勞働階級	全應答者
16歳以前	15	26	21
16歳から18歳	30	28	29
19歳から22歳	25	23	24
23歳，それ以上	28	22	25
解答なし	2	1	1
總計	100	100	100

第2表　年齢と在黨年限との關係（勞働階級）（％）

	5年ないしそれ以下	6年から10年	11年ないしそれ以上	全應答者
16歳以前	28	22	50	100
16歳から18歳	25	41	34	100
19歳から22歳	28	36	36	100
23歳，それ以上	75	21	4	100

第3表　年齢と在黨年限との關係（中産階級）（％）

	5年ないしそれ以下	6年から10年	11年ないしそれ以上	全應答者
16歳以前	51	35	14	100
16歳から18歳	48	21	31	100
19歳から22歳	43	32	25	100
23歳，それ以上	55	26	19	100

政治的背景

西歐における共産黨員の家庭には、共産主義、その他の左派的イデオロギー（社會主義、サンディカリズム、無政府主義等）を背景にもつものが多く、あらかじめそれらに對して受け入れ態勢がととのえられていることに注意する必要がある。應答者のデータの例では、その三四％までが、共産主義、その他の左派の家庭に育つている（第四表參照）。國別には、フランスとイタリーに高い比率があらわれている。ともあれ、このような左派的イデオロギーのもとに教育されたものにとつては、入黨することは自分自身の教育

第4表　國別にみた家族の政治的態度（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
共産主義	6	—	3	—	3
その他の左派	22	30	38	39	31
自由主義	11	28	10	17	16
保守主義	25	14	9	14	16
貴族主義	—	—	3	2	1
ファシズム	—	—	—	8	2
無關心	13	22	12	12	15
わからない	23	6	25	8	16
總計	100	100	100	100	100

のパターンから逸脱しているのではなく、それと同調していることを意味している。この場合、アメリカとイギリスでは、共産主義の政治的行動樣式自體が、社會全體からみれば、逸脱行爲と看做されているわけである。階級別にみると、中産階級の場合には、勞働階級よりも、自由、保守等の家庭的背景のものが多い。それ故彼等の行動樣式は寧ろ、政治的には逸脱しているものとみてよい。このことは、時期別には、後期黨員に當てはまる。地位別には、上級黨員に左派的な政治的態度の家庭のものが四五%、下級黨員に三九%、一般黨員に一四%となつていて、政治的背景というものが、黨における地位にも重大な關係を有することが示唆されている。

入黨時の狀況　入黨行爲は個人の選擇決定に基づく。しかしながら、以上に述べられた諸種の社會學的要因は、いずれも《決定論的》意味をもつものではないとしても、個人の選擇に多少とも影響を與えていることは否定できない。このことは、入黨者がある特殊的狀況におかれて行爲している事實によつても指摘されよう。すでに社會變動のところでみたように、入黨者は政治的・社會的破局によつて大きく左右される。それと同時に、そのような狀況に對決していく共産黨自身の戰術的方向の轉位によつても影響を受けざるをえない。今、時期を細分して示すと、第五表のとおりである。このパーセンテージの集中している層から、それぞれの時代相と入黨者の量的變化の相關關係が明らかに理解される。大きく分けると、第一次大戰直後數年間と第三インターナショナルの形成、經濟的不況期と人民戰線の初期、第二次大戰期とコミンフォルム設立に先立つ終戰直後、これら三つの時期の狀況において、大量に黨員が補充

第5表　地位別にみた入黨時期（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
1922, それ以前	6	17	41	18
1923——25	4	4	20	8
1926——28	6	5	6	6
1929——31	4	10	6	6
1932——34	12	8	12	11
1935——37	15	17	9	14
1938——39	10	5	—	6
1940——41	9	3	—	5
1942——44	16	16	4	13
1945——47	16	15	2	12
1948, それ以後	2	—	—	1
總計	100	100	100	100

されている。これを要するに、黨が新黨員の獲得に成功するのは、黨自體の片寄りが最も少ないようにみえる狀況においてであるといえるであろう。

Ⅲ　共產主義への感應性

共產黨への參加は、政治的動機によるばかりではなく、それには、パーソナルな情緒的問題、個人の欲求、利害、價値等による動機づけがいろいろなかたちで入り組んでいる。共產主義の感應性を解析するには、その度合のレヴェル、欲求や利害等のタイプ、各種の集團や階層において以上の二つが結合しているパターン、これらを體系づけてみなければならない。

すでにこの研究のはじめの部分で、共產黨員の認知構造を分析したとき、エソテリックとエクソテリックの區別が示唆されたが、同じように、感應性のレヴェルにもその區別が適用される。黨員には黨のエソテリックな性質を認知していたものとしていないものがあつたが、彼等の社會的・政治的背景の分析からも、黨のエソテリックな性質に感應する素地のあるものとないものとが明らかにされた。感應性のレヴェルにもやはり、エソテリックとエクソテリックの區別があり、多くの黨員はこの兩端の中間領域にあるのである。他方、共產黨の側からするイデオロギー上の戰術が共產主義への感應性に變化を與えていることも考慮に入れる必要があることはいうまでもない。

感應性のタイプについては、㈠神經症的欲求、㈡自己關連的利害、㈢集團關連的利害、㈣イデオロギー的利害、という四つの項目に分類され、分析がすすめられている。ここに神經症的欲求というのは、神經症的であると推定されるような慢性的・無意識的・不調整的な內的感情をあらわしているもので、これについては後にその症例をあげて說明を加えることとする。

自己關連的利害には、自己の履歷に對する利害、社會的關連性の問題、知的側面の明晰性に魅力を覺えること、これら三つの主要なタイプがある。應答者の一九%は、自分の前途への利害關係が入黨への動機と絡んでいる。例えば、ある詩人は彼の詩集を黨が出版してくれたという理由で、ある學生は黨が共產主義の學生に授業料を拂ってくれるという理由で、入黨している。社會的關連性の問題、つまりある社會狀況におかれた孤獨感から、集團的關連を得るために入黨したというものは、應答者の二〇%を占めている。また應答者の一二%ほどは、自己の知的欲求から、完璧な知性のパターンをマルクス主義に求めている。この種の利害が若い大學生に特徵的にみられるのは、《答えを知ろう》と願つている彼等の欲求を、共產主義が充たしてくれ、しばらくのあいだ黨に引きつけられるからである。

集團關連的利害によつて入黨するものは、黨を何らかの集團目的を實現する効果的方法として選んでいる。應答者の三九%がそうであるが、それに最も共通したタイプは勞働組合のリーダーである。集團目的はそれぞれの國に固有な問題狀況を反映している。すなわち、アメリカでは黑人問題が、フランスやイタリーでは愛國主義がとりあげられている。フランスとイタリーの多數の應答者が國家的利害と共產主義運動への參加を結びつけているのは、ナチズムやフ

ァシズムに對する祖國救濟のための抵抗運動には、共産黨ほど戰鬪的な力が見出されなかつたからである。

大部分のものが實際には、何らかの政治的・イデオロギー的利害をあげている。しかしそれは、エソテリックな目標についてではなく、エクソテリックな目標（人種的・民族的平等、社會的・經濟的平等、平和主義、國際主義等）についてである。彼等が共産主義に引きつけられるのは、パーソナルな情緒性の合理化といつたような見え透いた動機からだけだと思つてはならない。失業とか不況の慘狀、ストライキに對する警察の殘酷な仕打ち等々を目の前にして、眞に積極的・建設的な期待をよせて入黨したものも決して少なしとしないからである。

以上の感應性のレヴェルとタイプとによつて、そのパターンを、國別、階級別、時期別、地位別にみると、次の如くである。

國別による差異　先に各國應答者のエソテリックな教義についての認知を分析した際、フランスが最大にそれに接觸し、イタリーではその比率が最小であつた。このことは、兩國の共産主義のエソテリックとエクソテリックな教義に對する感應性の差異を示すものである。したがつて、假設的には、フランス共産黨はエソテリックな共産黨のモデルに、イタリー共産黨はエクソテリックなモデルに、それぞれ合致していると看做しうる。そしてアメリカとイギリスの共産黨は、その中間領域にあつて、黨のエソテリックなモデルを明細に認知してはいないけれども、その逸脫的性格をよくあらわしているといえよう。國別にみた欲求と利害のタイプは、アメリカの應答者に神經症的欲求が最高に示され、イギリスがこれに次いでいる。

第1表　國別にみた欲求と利害のタイプ（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
神經症的欲求	58	48	25	31	41
自己關連的利害	70	34	39	35	47
集團關連的利害	42	26	54	25	39
イデオロギー的利害	88	94	86	94	91

（複數解答）

これらの國では、一般に、フランスやイタリーに比べて、入黨者の情緒的欲求が高いことが知られる（第一表參照）。自己關連的利害についてみると、やはりアメリカで最も頻繁に示され、その社會的關連性の問題はアメリカ共産黨の人種的性格を如實に示している。集團關連的利害には、アメリカの黑人小集團、フランスの反ファシズム抵抗運動等、それぞれの國のユニークな性格が反映されている。イデオロギー的利害についても、アメリカのみが人種的平等、イタリーの反ファシズム・自由主義、フランスの反軍國主義・平等主義、と各國の特色が窺われる。このように、各國共産黨のエクソテリックなレヴェルにおいては、各々の民族的・歷史的經驗に由來する態度、地方的色彩が濃厚であり、エソテリックなレヴェルにおける《同質性》は、外皮に貼りつけられているにすぎない。

階級による差異　勞働階級は入黨前に、また黨内においても、エソテリックな教義に接觸したものは比較的僅かであつた。それに對して、中産階級は入黨前にエソテリックな教義に接觸しており、黨内でもフォーマルな教義をしばしば受けていたし、黨のエソテリ

ックな性格をも認知しているものが多かつた。こうした差異は、兩階級の感應性のレヴェルとも見合つている。つまり勞働階級はエクソテリックなレヴェルにあり、中產階級はエソテリックなレヴェル、あるいはその中間領域にあるように思われる。この假設は、第二表によつて肯定されるであろう。中產階級の神經症的欲求が勞働階級のそれの二倍以上の比率であるということは、黨の破壞的・逸脫的傾向にもかかわらず、また彼等の社會的・政治的・宗教的背景としばしば矛盾していながら、しかも彼等が黨への高度な感應性を有していることを示している。すなわちこれは、中產階級がその內的性格のうちに、心理的に困難な問題性を內包していることを裏づけている。彼等は、このような情緒的葛藤を解決しようとして、共產黨に參加する。しかし、勿論、すべての中產階級の神經症的欲求が共產主義に感應し易いという結論は正確でない。だが彼等が入黨によつて、その神經症的・情緒的問題をどうにかして知的に合理化しようとすることは、直接に怨恨を表現したり、あるいはアルコールとか性的淫亂の如き心理的痲痺作用に訴えて、問題を處理しようとするものより、よほど錯綜したパターンであることは確かである。

第2表　階級別にみた欲求と利害のタイプ（%）

	中產階級	勞働階級	全應答者
神經症的欲求	56	26	41
自己關連的利害	51	43	47
集團關連的利害	24	53	39
イデオロギー的利害	92	89	91

（複數解答）

さらに神經症的欲求を、アメリカ・イギリスとフランス・イタリーとをそれぞれ一つのグループとし、階級別に比較してみると、中產階級では前者の七五%對後者の三五%、勞働階級ではそれぞれ三二%對二一%となつている。中產階級の比率について、その合理化の差異に注意してみると、各國における情緒的要因と政治的態度との關連が、中產階級の共產主義者をよく特徵づけている。しばしば指摘してきたように、フランスやイタリーの知識人は、かつてのファシズムの侵害に直面して共產主義運動へ參加した。彼等は共產主義自體の害惡は氣にかけず、あるいはいくらか割引いて考えても、ファシズムの害惡よりはまだましであると思つていた。現在の狀態においては、兩國とも共產黨が勞働組合を牛耳つており、勞働階級を代表する運動を展開している。マルクス主義のイデオロギーは、フランスの知識人に影響力をもち、黨への參加は彼等の知的・道德的基盤を有している。最近、フランス知識人のあいだに、勞働階級への《參加（アイガージュマン）》ということがしきりに唱えられている所以である。アメリカとイギリスでは、いささか事情が異り、共產黨が深く根をおろしてはいない。勞働組合は非政治的、もしくは穩健な左派と結びつき、共產主義運動は、どちらかといえば、《逸脫行爲》と看做される。これらの國における中產階級の共產主義への感應性は、自己陶醉、例えば、興奮した精神錯亂に陷つているもの、學生とか獨學したもの、あるいは、怨恨のための權力欲とか、種々の劣等感を合理化しようとするものに見受けられがちである。こうした認識的歪曲は、誤謬の結果であるか、もしくは强制的におこなわれるか、意識の下層でおこなわれるかで、そのいずれのタイプも共產主義そのものとは直接的な關係が稀薄であ

る。ともかく知識人の活動は、多くの例では、いわば一種の美的な知性活動にほかならず、やがて社會科學に關する知的活動が洗錬されるや、彼等の信念は動搖をきたしていくようになる。

再び第二表に戻ると、自己關連的利害はほぼ同じであるが、豫想されたとおり、知的明晰化という點では、中產階級が多い。集團關連的利害は勞働階級に多く、しかも勞働組合の目的實現の手段として入黨したものが六九%を占めている。イデオロギー的利害では數値は同じようであるけれども、內容についてみると、中產階級がきわめて抽象的に平和とか國際主義等をあげているのに對して、勞働階級は、例えば、《炭坑地帶の勞働條件の改善》といったような具體的、地域的利害をあげているという差が認められる。

時期による差異　前期黨員は黨の教義にしばしば接觸していた。彼等は勞働階級のものが割合に多く、その家庭的背景においても、非宗教的であり、かつ急進的思想の環境に育っている。一般的に、前期黨員は後期黨員に比較して、黨の參加に同調することが容易であるように思われる。第三表によると、彼等は神經症的欲求をもつことが少なく、彼等の利害はそのイデオロギー的性格、社會・政治的性格と一致していることが示される。後期黨員には、神經症的欲求と自己關連的利害が目立っている。イデオロギー的利害の內容は、前者が平和主義、國際主義、後者が反ファシズム、とそれぞれの時代と政治的狀況を反映している。

地位による差異　上級黨員の大部分は、入黨前に教義に接觸していたし、その社會・政治的特徵からみても、感應性のエソテリックなレヴェルにあるといえる。彼等は他の地位のものより逸脫的ではない。そして彼等には一般黨員、下級黨員におけるよりも、神經症的欲求が顯著に少ないこと、それも主たるものは、神經症的敵意—慢性的敵對と人間關係における優越性への欲求であることも特徵的である。アメリカ・イギリスとフランス・イタリーの各グループにおいて、神經症的要求を地位別にみると、上級・下級一般黨員とも、前者のグループは、後者のそれに比較して、約二倍の倍率を示している。しかも注意すべき點は、兩方のグループとも、上級黨員はいずれも、他の地位のものと比較して、神經症的欲求が大體半分にしかすぎないことである。かくの如く、上級黨員には情緒的・心理的問題が附隨し

第3表　時期別にみた欲求と利害のタイプ（%）

	前期入黨者	後期入黨者	全應答者
神經症的欲求	38	44	41
自己關連的利害	42	51	47
集團關連的利害	44	33	39
イデオロギー的利害	94	87	91

（複數解答）

第4表　地位別による欲求と利害のタイプ（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
神經症的欲求	46	48	22	41
自己關連的利害	55	41	37	47
集團關連的利害	40	32	45	39
イデオロギー的利害	87	93	94	91

（複數解答）

ていることが少ないことがはつきり確認される。イギリス・アメリカの場合にしても、上級黨員の多くはマルクス主義的傾向の家庭なり共同社會からの出身者であり、彼等の入黨行爲は、國全體からみて政治的に逸脱していても、それ自體は逸脱したものとはいえない。イデオロギー的利害に關しては、上級黨員は第一次大戰後の初期の運動に參加したものが殆んどで、彼等は黨のエソテリックな教義に牽引されている。

以上のデータを集約してみると、共産主義運動に對する情緒的な感應性がとくにあらわれているのは、中産階級、知識人であつた。次にこの情緒的不調整の要因、神經症者のタイプを具體的に例證してみよう。

Ⅳ　神經症者のタイプ

情緒的問題一般について結論的にいうと、情緒的に不調整なものが共産主義に感應しがちであるということは證明できる。しかしながら、このような感情的要因だけでは何ら決定的な意味をなさないということを忘れてはならない。入黨の確率度には、個人のもつその他の側面、知識とか價値、黨への特殊な接觸の仕方等が作用因となつて、感情的要因に包絡されているからである。あるいはまた、不調整の特定のパターン、個人の發展的パターンというものが、共産主義への感應性と常に符合するとも限らないのである。以下のデータには、いろいろな家族關係やパーソナリティの形成過程が示されている。しかしそこには、何らかの特定の《エディップス》パターンといつたようなものがあらわれていない點も指摘しておく必要があろう。

敵意　共産黨のエクソテリック・コミュニケーションに戰鬪性や敵意が强調されていたように、入黨者の感情に共通してみられるものは、怨恨、敵對心、反逆、憎惡等である。しかしながら、狀況的原因によつて、かかる敵意を抱くようになつたものにとつては、黨への參加は外的狀況への自己調整としてはたらいているにすぎない。かくして一たび彼の期待が黨によつて裏切られると、黨を去つて他の手段を求めていくことになる。彼にとつては、調整のメカニズムは學習過程と現實のテスト以外の何ものでもない。それに對して、神經症的に敵意を抱くようになつたものは、外的狀況に對する敵對心もさることながら、自己の內面的な神經症的欲求に基づいて入黨するに至るわけである。實は、この差異は重大である。何故なら、脫黨する場合を考えてみると、狀況的問題をもつているものより、情緒的問題をもつているものの方が、より一層困難であろうと思われるからである。脫黨過程の問題はさておき、神經症者は入黨することによつて、自己の諸要求を滿足させるとともに、極度の憎惡をぶちまけて、それを政治的世界へと投射させていく。多くの症例によると、神經症的敵意は、家庭および幼時期の體驗から派生する慢性的・無意識的敵對感情であるという（以下に引用する症例は原書の一部である）。

〔ルィギの症例〕彼はナポリの中産階級の上流層の家庭に生れた。父はある專門家であり、熱心なファシスト。母はナポリ社交界のリーダー。彼は兩親から全く無視された存在だつた。五歲の時、黑シャツ隊の行進をみに連れていかれたことがあつた。威風

堂々たる父親が先頭の一人にみえた。その時のこと、行列を眺めていた勞働者風の男が背を向けて、鋪道に唾をはいた。彼は途端に打ちのめされ、牢獄に引つぱつていかれた。この情景はルィギの記憶にこびりついて離れがたいものとなつた。やがて戰爭が勃發したが、父はアビシニア戰爭にも、スペイン内亂にも從軍しなかつた。そしてルィギには、ファシスト軍の義勇兵になれと勸めるのだつた。しかし彼はこれを拒否したために、勘當されてしまつた。彼は、勞働者を父親にもつ學校友達の家に住みつくこととなつた。そこで彼は、反ファシストの地下活動を知るようになつた。また、黨の地下細胞の集會にも連れていつてくれた。ルィギは懸命に勉强した。彼がファシズムの指導者やナポリ地區に詳しいので、黨は、彼の忠誠心をためすため、スパイの役目を彼に與えた。間もなくして、彼は警察の檢擧でつかまり、反逆罪として裁判された。父は裁判に立會つたが、泣きすがる母をふりきつて、ルィギは勘當したと陳述した。彼は十五年の投獄を判決された。南部イタリーの解放とともに釋放される身となつた彼は、父への復讐心にかられ、父が北部に逃亡したことを聞きつけた。ふたたび黨の密通として活動している間に、ナチに捕えられ、身柄をイタリー側へ引渡されることとなつた。ところが突然、父が監獄を訪ずれてきた。彼は父との和親をいつわつて、父のためにスパイとしてはたらくと申し出た。これを本氣にした父は、息子に情報を與えてしまつた。ルィギは監獄からの連絡を通じて、黨仲間に傳言し、父の所在地を奇襲させ、遂に父を殺すことに成功した。

孤立感　共産主義者が絶えず强調していることは、組織、相互關連性ということである。だがそれは、各人がただ集團に關連しているということではなく、みなが一種の神秘的共同體へ融合しているような同一化意識である。それ故に、狀況的に孤獨を感じているものは、いとも容易にそれを分有しようとする。神經症的に孤立化している人間は、それと反對に、自己自身に引きこもる傾向をもち、その防衛のメカニズムは敵意を極度に抑壓し、ある意味で、自己の感情に對してすら自分自身を防衛し痲痺させてしまおうとする。だがこうした極端な場合は別として、神經症的孤立感をもつものも他者との關連をもつ必要を感ずる。彼が共産主義を選ぶことには、無意識的な敵意がはたらいているのかも知れない。その誘因がどんなものであれ、黨は彼に役割、課題、同志を與えてくれ、かつ外的世界に對する態度をも規定してくれる。かくて、神經症的逃避者は自己の痲痺狀態を回避しえて、何か有意義な行動をしているという錯覺をもつに至るのである。

〔アルヴィンの症例〕彼は外國生れのユダヤ人の家に二男として生まれた。父は畫家兼裝飾業者で、常に仕事にわずらわされていた。家族はシカゴのウェスト・サイドに住んでいた。母は近所づき合いがよくなかつた。兩親のあいだに愛情はなく、喧嘩の斷え間がなかつたほどだ。そればかりか、アルヴィンにも愛情というものが與えられたためしがなかつた。病氣の時ですら彼は介抱一つしてもらえなかつた。母親は彼を外に出さず、友達と遊ぶことも禁じていた。兄が少しでも反抗しようものなら、さんざんに叱咤される始末だつたので、彼はおとなしく、默つていた。アルヴ

ィンの學校の成績はよかつたが、たとえAをとつてもBとかCとか嘘をついた。それも母親の滿足感を奪つてやろうとしたがためだ。彼が共產黨員となつたのも、こうした孤獨感からであつた。彼は別段、社會や家族にひどい怨恨を感じていたわけではない。むしろ敵意は自分の內奧に深くかくされ、逃避によつて敵意と外部からの傷害に、かたく身をまもつたのである。彼は生活の目標とか出世の欲望等は少しももつていなかつた。彼は、敵意を抑壓し、他人を攻擊するよりかは自分を傷つけるような否定的態度をとつた。彼を診斷した精神分析學者は、《單純な精神分裂症—孤獨な、孤立した、皮肉な自己敗北的人間》と要約している。

自己拒否　共產主義はまた、環境において孤立せるもの、それから逃避しているもののみか、環境によつて拒否されているもの、あるいは、そのように感じているものにも、訴えかける。この場合にも、黑人とかユダヤ人、あるいは失業者の如く、狀況によつて自己が拒否され、無價値であると感じているもの、自己の幼時期の體驗において、自己の力量なり價値なりに內面的・慢性的な懷疑と不信の痕跡を殘し、自己を弱きもの無價値なものとして拒否しているもの等、それぞれに多彩なヴァリエーションが見受けられる。かかる自己拒否のメカニズムは、しばしば、倒錯した性的關係や自墮落、奇妙な偶像破壞的行爲、恥辱、失敗等に對する自己卑下の神經症的感情をあらわし、一種のボヘミヤニズムへと導かれる。かくて黨は、それに對して救いの手をさしのべてくれるのである。

〔アリスの症例〕彼女は外國生れのユダア人の家庭に生れた。彼女は幼年期に、しきりに誰からも受け入れられたいと感じていた。そして、異教徒の子供達の生活態度をまねし、自分のユダア人の血統や外國人らしさを否定しようと努力した。彼女はスポーツに興味をもち、快活にみなをリードした。けれども、そうした彼女の努力にもかかわらず、彼女は、何かしら欺瞞があるというもやもやした感情に惱まされることが常であつた。つまり、ユダア人なるが故に、どうしてのけ者にされるのかという感情がそれであつた。それに加えて、彼女の家庭內には經濟的浮沈が甚だしく、いざこざが絕えなかつた。大學に進級すると、アリスは外國人に典型的な發展經過を辿つていつた。すなわち、彼女は共產主義の青年達と交わるようになつたのである。根こぎにされているという感情を靜めるために、彼女は、何か廣大な、そして意義深い力强いものにすがりたいと感じていたのだ。共產主義はアリスに、歩むべき方向を指示してくれた。アリス自身は、ユダア人問題からの逃避のメカニズムを、こう記している。「もしあなたがたが何處かの國に屬することができなければ、何處の國にも屬していないことと同じだし、誰だつて一つの國に屬すべきではないのです。もしあなたがたが異教徒に受け入れられなければ、全く違つた集團に參加し、そのような集團に意味をあたえ、……孤立の中にあつて夢を抱いてはどうしていけないのでしようか」。

〔ジョアンの症例〕彼女は貧困な外國人の家庭に生まれた。父は靴屋で、家族はその店裏に住んでいた。彼女が十二歳の時、母は病に犯され、一年後に死んでしまつた。父も十六歳の時に死んだ。ジョアンは學校の成績は素晴らしかつたが、友達というもの

はまるでなかつた。彼女は上級生のあいだで不人氣であつた。彼等は、彼女の外國人の血筋を嘲笑し、いじめた。兩親が死亡して後、彼女と妹は暮し向きのよかつた叔母にあずけられることとなつた。ジョアンは叔母との折合がまずかつた。そして妹の方が可愛がられているのではないかと思つていた。十七歳の時、彼女は叔母の家を去つて、働きに出た。やがて彼女は、藝術家くずれのいかさまグループに足を踏み入れるようになつていた。幾つかの戀愛をしたが、いずれも彼女の意に充つることはなかつた。最後の戀愛事件というのは、手のつけられぬほど混亂したある男とであつたが、彼の殘忍な仕打ちにあつて別れ、その後彼女は、ある年上の女と一緒に住むようになつた。この女は同性愛的異常者であつた。ジョアンは、こうした關係に卷き込まれても、滿足させられることはなかつた。ある夏、休暇の折、とある共産主義勞働學校に出席してみる氣になつた。彼女がそこで受けた印象は感銘深かつた。そこには頑强で、健康で、友情に厚い人々がいたのである。彼女にとつて、共産黨は一種のサナトリゥムの如くに思われた。ボヘミアン的な頽廢、情緒的な惡弊から拔けだす途は、入黨するより以外になかつたのである。

五　共産主義者の脫黨過程

I　不滿のタイプとパターン

共産黨の認知の仕方、共産主義者の社會・心理的特徴は、黨への同化過程のみでなく、黨からの脫黨過程にも影響を及ぼす。そこで先ず、同化過程の諸段階に一瞥し、そこにどのような葛藤が生じているかを分析してみる。黨員の大多數に典型的にみられる同化過程は次の三段階である。第一段階は黨への參加、ここではエソテリックな黨の性質を把えていることは殆んど例外的といつてよい。第二段階は行動への移行、ここにおいて新しい補充黨員に課題が與えられることとなる。第三段階は《スローガン化》、これは教化の段階であつて、ここにおいて黨の儀式的雰圍氣に關與するようになる。大部分の黨員は《行動》と《スローガン化》の領域にとどまるわけで、それらを《突破》していくか、それらから《脫退》するようになるかという岐點が、エソテリックな黨の中樞部に昇級するか、もしくはそれから反撥して脫黨に導くかになるのである。黨に對する不滿は、右の同化過程のいずれの段階にも生ずることが可能である。だが大部分の場合、これらの三段階を經驗して、その間黨によつて加えられた自分の利害や價値の損傷が、離脫の原因を累積していくこととなる。その不滿のタイプは、データを分類すると、次の五つの範疇をもつている。㈠履歷に關連する不滿、㈡パーソナリティや人間關係に加えられた壓力、㈢黨以外の集團への忠誠心に加えられた壓力、㈣價値に加えられた壓力、㈤道德的基準に加えられた壓力。

履歷に關連する不滿　應答者の半數以上は黨職員か、黨支配下にある諸組織の有給役員であつた。その他に黨機構內の下位のもので、無給のものも相當いた。彼等のうち二二％は黨內での彼等の履歷が中絕されたか、混亂させられたかを脫黨理由にあげている。黨の決定によつて自分のポストが交替させられるような場合、それは、軍に服役後、復黨してみると自分の地位が他のものによつて奪われていたことに憤慨したあるイギリス人の例に示される如くである。

またあるイタリー婦人の例では、イタリー婦人連盟のユニットを組織するよう指令された彼女は、中途でその仕事を他人に引渡すよう命令され、さらに新しいユニットを組織するよう他の村に送られることになつた。彼女は黨の官僚的なやり方に抗議を申し込んだため、《反動的》であると非難された。黨員であることと黨以外の自分の仕事とに葛藤が生じ、それが自分の履歴にハンディキャップとなるというような場合（應答者の一三％）もある。あるアメリカの作家の例をひくと、「……わたしは何か善いこと、倫理的なことをしているように感じた。しかしわたしが拂つている代償は、自分の才能を頓挫させてしまうことであつた。わたしには書く時間、熟考する時間等が全然なかつた。……遂に、わたしを決裂させたものは、もし黨にとどまつていたら、わたしは、自分のうちにある非常に貴重な何ものかを、殺してしまうことになると意識したからだ」と。

黨の要求とパーソナリティ　黨はしばしば個人の性格や行爲の基準に悖る振舞いを強制する。應答者の九％は殘酷な行爲を強いられたことによつて、その一七％は他の人間を操作することを餘儀なくされたことによつて、その二四％は個人の破壞、非人格化を嫌惡したことによつて、黨から離れていつた。殘虐行爲は敵對者に對してばかりではなく、黨員仲間に對してすら容赦なくおこなわれる。なお、それは物理的暴力に限つたことではない。しばしば、黨員の逸脱行爲や不服從に對しては、酷たらしい侮辱が加えられ、かかる過ちを犯したものは公けに告白させられるのである。こうした例はあげればきりがないし、敢て例證にもおよばないであろう。他者を操作することへの反感は、次のイタリー人の言葉に明瞭に表現されている。「わたしが話かける大衆を、わたしは心から愛していた。そのうちにわたしは、黨機關――すべてのハイアラキーは大衆を少しも愛しておらず、ただ形なきマスとして彼等を操作しているだけだということに氣付いた。……事實、黨はただ集團的頭腦を必要とし、知識人としてのこのわたしには、このような非人格化において助力を求めていたのである」。さらに、個人のパーソナリティの破壞、《頭腦の結晶化》については、十八年間黨にいたフランス人がこう語つている。「彼等はカフカの小説の主人公のようにしやべつていた。彼等は涸ききつていた。彼等はユマニテしか讀んでいなかつた。これらフランス人同志のあいだにいて、わたしはぞつとするほど獨りぼつちなのを感じた。そしてとても彼等と一緒にとどまつていることはできなかつた。彼等に對して、諸君がちよつとした疑惑でも抱こうものなら、殺されたも同然だ。彼等の人間性は變化され、原子化され、崩壞されている。彼等は恐るべき人々だ。彼等は自らの魂を失つてしまつているのだ」。

人間關係に加えられた壓力　應答者の二九％が、兩親、兄弟、夫婦、友人等、人間關係に對する黨の迫害を、脱黨理由にあげている。製造工場の經營者を父親にもつあるイタリーの技師の話である。父は彼が入黨することに反對はしなかつた。コミンフォルムが設立された時、工場にストライキが起り、息子がピケ・ラインを張ることとなつた。父が晝食をとりに出かけようとすると、附近の町から應援にかけつけたピケ隊が、父の車を取り圍んだ。彼が車から上體を乘りだして、用件をたずねても、誰も口を開かなかつた。彼が車をおりると、ピケ隊員の一人がいきなり彼の顔に唾を吐いた。

立腹した父は、工場經營者としてではなく、個人の尊嚴を毀損された人間として、相對で話し合おうとその卑怯者にいうと、ピケ隊は立退いてしまつた。この事件をみていた息子は最早忍びがたく、脱退してしまつた。

集團への忠誠心に加えられた壓力　多數のものは入黨する時、共産主義運動の要求する完全なる忠誠心を充分に意識していない。黨と國家、小集團、勞働組合等との利害對立は考えられていないようである。例えば、獨ソ不可侵協定の締結はどれほどの混亂を西歐諸國の共産黨に惹起せしめたか、ソ同盟の政策に各國の運動を犧牲にすることが如何に不可能であつたかは、經驗の示すとおりである。また、黨のために勞働組合の利害を捨てて顧みないことは、決して勞働者の實質的目的にかなつているといえず、黨はいつでも勞働者の立場を保護しているとはいい難い。各種集團の利害を黨に從屬させることにも、少なからざる抵抗が生ずる。黒人やユダア人の應答者が報告しているところによると、彼等自身のもつ問題は黨のプロパガンダとして利用されているにすぎないのである。ある若い黒人の黨員は、黒人問題の映畫製作に關與するため、モスクワに派遣された。何らかの理由でその企畫が變更されたので、彼はその決定に強く抗議した。長い論爭の末、ロシアの高官が彼にいつた言葉はこうである。「一體君は、共産主義者なのかニグロなのか」。イタリーのようなカトリック教徒の國では、宗教的信仰と共産主義とのあいだに悲劇的相剋が起る。イタリーにおいては、共産黨員であつても教會に通い、秘蹟を受けるものすらある。

價値の葛藤　應答者によつて報告された價値の葛藤は、知的・藝術的・政治的・經濟的諸價値に類別される。知的・藝術的價値の葛藤は、主として、黨のジャーナリスト、學者、藝術家等のあいだにみられる。先にも觸れた獨ソ不可侵協定によつて生じた黨ジャーナリストの良心の危機、ルイセンコ論爭をめぐつての遺傳學者の學問的動搖の危機等は、餘りにも周知の事實である。黨の藝術に對する執拗な干渉は、藝術家の果敢な反抗となつてあらわれている。政治的價値の葛藤は、黨の權威主義的運營方式、役員の選出、討論の方法等への批判として、すべての黨員のあいだで認められている。經濟的價値の葛藤は、黨員である勞働組合員、小企業經營者、協同組合管理者等が訴える苦情に示されているように、黨の政策決定、執行命令がしばしば彼等の經濟的損失、生産性の低下をもきたしている。

以上の不滿の諸タイプの幾つか、あるいはその結合が、各個人のうちに特殊的經驗をかたちづくつていく。しかしそれらは、ランダムな様態で散在しているのではなく、國別、階級別、地位別、時期別によつて、やはり一定のパターンをなしている。それを要約的に述べてみると、國別では、イタリーの應答者の四五%が個人性への脅威を非難している。これは、ファシズムの壓迫への反動として入黨した彼等が、殊更黨の權威主義的教義のインパクトを痛切に感じ、期待を裏切られたと感じとつているからにほかならない。アメリカやイギリスの應答者は黨生活の雰圍氣や交際關係の不快さを感じているが、これは、黨の陰謀的・獨斷的生活様式が、彼等の周邊の社會様式と鋭く對立することに起因している。なお、アメリカの黨員間では、白人と黒人とが和合していない點も、その黨の異質的性格がもつ問題であろう。階級別には、中産階級と勞働階級との差異が

特に著しい。第一表を參照すれば、個人性の喪失、知的價値・藝術的價値との對立において、兩者の性格は最もよくあらわれている。地位別にみると、上級黨員に黨内の履歴に關する不滿が多いのに對して、下級・一般黨員には、黨外の職業や成功のために不滿を訴えているものが頻繁である。黨内の雰圍氣、知的價値、藝術的價値に對する不滿は、下位の地位にあるものほど多いことも興味ある。時期別にみて最も重要なことは、前期黨員には現在の黨がマルクス・レーニン主義から偏差していると批判しているものが多いことである。かかる事實は、黨における形式的教義の影響力が脆弱になつてきていることを證明している。

第1表 階級別にみた不滿のタイプ（%）

	勞働階級	中産階級	全應答者
履歴の分裂	27	17	22
個人性の喪失	16	32	24
黨内の雰圍氣	40	53	47
ロシアの支配	19	28	24
黨對知的價値	11	42	29
黨對藝術的價値	1	12	6
黨對政治的價値	25	34	29
黨對經濟的價値	10	7	9
勞働組合對黨	46	14	29

（複數解答）

このように、黨に對する不滿は、各人の社會的性格、職業上の種類および黨組織においての地位等に關連して、いろいろと異なる。さらにそうした不滿は、入黨によつて各人が充足しようとしている欲求や利害によつても當然異つてくる。今、應答者を、入黨前に情緒的不調整に陷つているものとそうでないものとを、それぞれ神經症者および非神經症者として事例別に分類すると、次の如き結果が得られる。神經症例九四、非神經症例一二七のうち、例えば、黨内の履歴に葛藤をきたしているものは各〻二九%對一七%、黨内の交際や雰圍氣に葛藤をきたしているものは六三%對三五%、である。かくて、入黨前に人間關係に困難な問題をもつていたものは、黨内にあつてもその困難を解決することができないのではないかと推定されていたわけであるが、結果はまさにその通りにあらわれている。情緒的に不調整なものは黨内でもうまくいかないのである。彼等は黨に安定した忠誠心を缺いているにもかかわらず、黨にとどまらざるをえないというディレンマをもつている。

Ⅱ 脱黨過程とその後の調整問題

以上の如く、個人と黨とには、複雜な機緣がまつわりついているだけに、脱黨過程にもいろいろな困難が伴つている。どのような集團でも政黨でも出鱈目に入黨や脱黨が許されないのは勿論であるけれども、共産黨の場合、とくにそれが嚴重に取締られていることはいうまでもない。黨は極力脱黨を防ごうとする。しかしそればかりでなく、脱黨者は政治的に安全な中立性を守るということはできない。彼は《異端者》として、如何なる敵對者よりも激しく、憎悪の對象とされてしまうからである。

ところで、脱黨の容易さと困難さに影響してくる要因としては、第一に黨とのかかわり合いの程度の問題があげられる。勞働組合のリーダーシップをより効果的にしようというような期待をもつて入黨する一般黨員は、黨外部との接觸も保つており、たとえ脱黨して

も、勞働組合の活動を接續していくことが可能であり、脱黨後の調整もさほど困難ではない。それに對して、黨に全面的にかかわり合い、それによつて生活をたててきた上級黨員は、外部との接觸もなく、外界から受ける敵對感情も強く、最大の困難に出會わされるであろう。第二は離脱後の個人に待ちうけている外部の狀況に對する見透しの問題である。共産主義に代るべき政治運動の存在、前黨員に對する社會の制裁等が脱黨の比率を支配するであろう。第三は黨のメンバーシップとして滿たされる欲求や利害が他の適當なところでも滿たされるかどうかという問題である。ここにおいては、入黨に際しての狀況的原因か神經症的原因かによつて、脱黨行爲およびその後の將來にも至難な葛藤をひき起していくことが豫想される。

脱黨までの懷疑の期間　多數の脱黨者は、黨を去る前に、懷疑と優柔不斷の期間を經ている。第一表によると、應答者の三分の二が脱黨の最終決定にいたるまでに、一年以上の期間を費している。しかしあるものは懷疑しはじめても、自分自身に確信がもてず、あるいは黨を去ることを卑怯であると感じ、あるいは自分が重大な過失を犯したと自らに納得させる氣になれず、あるいはまた、もし離脱したら、黨が如何なる報復手段に訴えてくるか、外部の社會が自分自身に如何なる制裁を課するかを恐れて、黨にとどまつてしまうという。こうした懷疑の期間は地位によつて差がある。三年以上の期間は、上級黨員の三五%、下級黨員の二一%、一般黨員の一七%であり、一年以下はそれぞれ一二%、二五%、三二%と對照的である。

脱黨の困難性　すでに述べたように、黨からの脱黨は容易な業

第1表　地位別にみた脱黨までの懷疑の期間（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
7年，それ以上	7	9	14	9
3———7年	10	12	21	14
2———3年	15	20	26	19
1———2年	26	25	17	23
1年以下	32	25	12	25
わからない，あるいは疑わない	10	9	10	10
總計	100	100	100	100

黨員は除名された黨員と口をきいてはならないというのが規則だ。除名されたものは破門されたと同じである。わたしは、諸君に、そして多くの人々に對して、保證しよう、それがほんとのドラマであるということを。……そのような狀況から脱出するには、それこそ勇氣がいる」と。かかる困難性を國別にみると、フランスとイタリーの方がアメリカとイギリスより、やや困難の度が強いように思われる（第二表參照）。それには幾つかの要因が指摘されるが、第一はフランスとイタリーの共産黨が有力な運動であること、第二にそ

ではない。あるフランスの黨員はいう。「かつて諸君は不一致を理由に、黨を去ることができたのだ。諸君は離脱する權利を有していた。諸君は敵となつたが、全き公權喪失者ではなかつた。しかし今日、諸君がもし離脱しようものなら、諸君は政治的自殺として取り扱われる。諸君は破壞される。友人の誰一人として、諸君にふたたび話しかけるようなことは決してなくなる。それこそ、黨が人々を保持していく方法なのだ。

れらの黨は、他の二國の黨よりも一層有効的に脱黨者を脅迫できること、第三にフランスやイタリーには左派政黨の力が比較的弱く、脱黨しても、さしあたつて參加すべき代替物がないこと等があげられる。地位別にみた場合、その差異には著しいひらきが示されている（第三表參照）。

情緒的問題を解決する手段として入黨したものは、脱黨に際し

第2表　國別にみた脱黨の困難性の度合（%）

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリー	全應答者
極度に困難	6	14	13	21	13
困難である	36	30	34	37	34
それ程でもない	19	12	19	16	17
問題にならない	33	44	25	22	31
わからない	6	—	9	4	5
總計	100	100	100	100	100

第3表　地位別にみた脱黨の困難性の度合（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
極度に困難	—	19	30	13
困難である	29	40	37	34
それ程でもない	20	12	18	17
問題にならない	46	25	9	31
わからない	5	4	6	5
總計	100	100	100	100

第4表　欲求のタイプと脱黨の困難性との關連（%）
（イギリス・アメリカとフランス・イタリーのグループ別）

	神經症者		非神經症者		全應答者
	イギリス・アメリカ	フランス・イタリー	イギリス・アメリカ	フランス・イタリー	
事例數	60	32	54	75	221
極度に困難	10	23	9	14	13
困難である	44	33	20	36	34
それ程でもない	15	7	17	22	17
問題にならない	28	33	51	19	31
わからない	3	4	3	9	5
總計	100	100	100	100	100

て、狀況的問題によつて入黨したものに比較すると、より困難であろうということは、先に假設的に述べておいた。データによると、神經症者で困難を感じたというもの五五%、非神經症者で四二%となつている。しかしこの比率は、さらに各國における政治・社會的狀況、共産黨の機能の差によつて見なおしてみないと、より正確な解答を得られない（第四表參照）。イギリス・アメリカでは、神經症者についてみて、極度に困難であるというものと困難であるというもの合計五四%、フランス・イタリーでは五六%であり、これらはほぼ同率である。それに反して、非神經症者についてはそれぞれ合計二九%對五〇%

という比率の差が示されている。ところが、問題にならないというものは、神經症者について二八%對三三%、非神經症者について五一%對一九%と、兩グループの差は歴然たるものである。第四表のデータが示すように、情緒的に不調整なものは、その破壞的・疎外的性向の捌け口を共産主義に見出しているわけであるから、國のいずれを問わず、そもそも彼等にとっては、それ以外に解決の方法がなかったのである。すなわち、兩グループにおいて、神經症者が等しく脱黨に困難を感ずるという結果があらわれているのは當然のことといえる。他方、非神經症者、《正常》な人々のあいだでは、兩グループの差異はそれぞれの政治的パターンと照應していることを告げている。すなわち、イギリス・アメリカでは共産黨が大衆的基盤を缺き、支配的な行動様式とも對立している。正常人は、もし入黨して滿足させられなければ、直ちに他の方法を選擇することが可能である。ところがフランス・イタリーでは、先に指摘された理由から、黨を去ること自體が困難であるとともに、共産黨に代るべき左派政黨もなく、イギリス・アメリカに比べて、正常人の脱黨が困難とされる所以である。

調整問題のタイプ　應答者のデータから、次の四つの調整問題のタイプが抽出される。第一は自己の一貫性を保持していこうとする問題、第二は離脱後の履歴、職業上の問題をどのようにしていけばよいかという問題、第三は離脱後の新しい人間關係、友人、夫、妻をどのようにして見つけていくかという問題、第四はイデオロギー、哲學上の調整として、自己の價値を如何に考えなおしていくかという問題。共産主義者の多くが語っているように、自分が長年の

あいだ生命を賭してきた共産主義の運動が《偽りのための闘い》であったとは、どうしても容認し難い。過去と袂別しなければならないという苦悶は、並大抵ではないと想像される。また、脱黨者が生活をたてていく前途は極めて多難である。共産黨は脱黨者の行狀を就職先に密告しては、彼の評判をそこなわせる。「わたしは黨外の誰とも交渉をもっていなかったし、關係ももっていなかった。わたしは他の環境に誰も知り人がいなかった。二年間というもの、わたしは行き當りばったりに、まるで空虚の中に生活していた」とあるフランス人は述べている。脱黨者が社會生活を再建していくに、如何に困難であるかが察知されよう。最後に、知的・道德的價値の問題に關しても、深刻な反省が繰り返されている。「他の世界との交渉を取り戻し、幾っかのはね返りを避けるには長い時間かかる。わたしは長いあいだ獨りきりでいて、新たな均衡を見つけだそうと努力せねばならなかった。わたしは瞑想に多くの時を費した。わたしは科學や技術への信念を失って、宗教に舞い戻っていった……」とあるフランス人は語る。また、自己檢討の苦澁な途を古典の世界に求めていったあるアメリカの知識人は、「諸君は何ものかを信じようとしてはじめ、何を信じてよいか分らずに終る」と述べている。

こうした調整問題は、國別、階級別、時期別にみても差異が示されるが、それが最も明確なのは地位別にみた場合である（第五表參照）。履歴上の問題、人間關係の問題、價値轉換の問題、いずれも上級黨員は他の二者より困難であると記している。問題ないというものは地位の序列にしたがっている點も、けだし至當な結果であるといえよう。欲求のタイプと調整問題との關連については、神經症者

がより一層困難に遭遇させられている。人間關係の問題では、神經症者の四七%に對して非神經症者の二二%となり、比率の差が二倍以上である。第六表は、第四表と同じように、グループ別に比較したものであるが、ここで、フランス・イタリーでは、履歴上の問題、價値轉換の問題は、神經症者と非神經症者ともに同率に近い。これをイギリス・アメリカと對比すると、フランス・イタリーの方が調整問題にも困難が多いことが判り、第四表の見解と一致している。

第5表 地位別にみた調整問題（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員	全應答者
履歴上の問題	9	25	27	23
人間關係の問題	21	40	41	32
價値轉換の問題	22	32	41	29
問題なし	68	30	28	46

（複數解答）

イデオロギーの喪失過程

脱黨に當つては、共産主義イデオロギーが全面的にか、部分的にか拒否され、やがて新しい他の政治的態度が採用されることとなろう。この第一段階にあつては、相當數のものは、脱黨當時、共産主義を全面的に拒否していない。したがつてそれが完全に拒否されるまでには、恐らく時間的經過があるものと考えられる。そこで、脱黨當時とインターヴュー現在とで、そのイデオロギーの拒否の種々相を比較してみると、第七表の如くである。脱黨後もなお黨に忠誠であるというもの（七%）は、黨への忠誠心とは關係のない何らかの理由によつて、除名されたか脱退させられたものである。自國の黨を拒否したもの（九%）は、黨のリーダーシップや政策決定に不滿をもつていたもので、國際共産主義やソ同盟への忠誠心を失つているのではない。スターリン主義を拒否しても、依然としてレーニン・マルクス主義の信念を抱いていたもの（二四%）は、脱黨後に、多くは極左派、トロッキストとなつている。レーニン・スターリン主義を拒否したもの（九%）は、マルクス主義のみの信念をとどめている。マルクス主義、ないしは革命的社會主義を全面的に拒否したもの（四六%）は、これらすべてのうちで最も多い。

以上の區別は、必ずしも共産主義イデオロギーを全部理解した上でおこなわれているというわけではない。ともかく、インターヴュー現在では、應答者の三分の二（六六%）が全面的に拒否する態度を示している。イデオロギーの喪失過程は時の經過によつて、さらには教化の度合によつて、長短の差が見受けられる。けれ

第6表 欲求のタイプと調整問題との關連（%）
（イギリス・アメリカとフランス・イタリーのグループ別）

	神經症者		非神經症者		全應答者
	イギリス・アメリカ	フランス・イタリー	イギリス・アメリカ	フランス・イタリー	
履歴上の問題	18	38	7	32	23
人間關係の問題	48	41	19	24	32
價値轉換の問題	33	31	17	35	29
問題なし	45	38	61	40	46

（複數解答）

第7表 共産主義イデオロギーの拒否の諸相（%）

	脱黨當時	インターヴュー現在
脱黨後も黨に忠誠	7	3
自國の黨の拒否	9	3
スターリン主義のみ拒否	24	10
レーニン・スターリン主義の拒否	9	10
マルクス主義の拒否	46	66
わからない	5	8
總計	100	100

どもそのパターンは、マルクス・レーニン・スターリンの教義を綿密に吟味していく過程であるよりも、一擧にそれから脱却してしまう場合が最も典型的である。

國別にみると、フランスとイタリーの應答者はインターヴュー現在、イデオロギーの形跡をより多く殘していることが知られる。時期別には、脱黨當時で、前期黨員の三三%が全面的に拒否し、インターヴュー現在五五%となつている。後期黨員ではそれぞれ五九%と七八%である。地位別にみると、脱黨當時、全面的に拒否しているものは、上級黨員二八%、下級黨員三八%、一般黨員六一%、インターヴュー現在でそれぞれ五六%、五七%、七七%。しかし部分的に拒否しているものは、脱黨當時でそれぞれ六四%、五六%、三七%、インターヴュー現在でそれぞれ四〇%、三二%、一四%となり、地位が高ければ、それだけイデオロギーのある部分なり側面なりを留保していることが確實である。

脱黨後の政治的態度　大多數のものは、脱黨後、左派系統の運動に轉向するようである。データの内譯は詳しくは第八表に示されている如くである。脱黨當時、極左派（トロッキズムその他）であつたものは、インターヴュー現在、穩健左派、もしくは勞働組合活動に轉ずる。各國別に政治的態度の差異を記すことは差控えるが、イギリスの場合、その特徴的な點を指摘すると、第九表に明らかなように、脱黨後直ちに、その半數以上が勞働黨に轉じ、インターヴュー現在では大部分（七八%）がそう

第8表 脱黨後の政治的態度（%）

	脱黨當時	インターヴュー現在
宗教への轉向	6	6
極右派	1	2
保守派	1	2
穩健左派	32	41
極左派	18	6
勞働組合	12	12
無關心	17	18
その他	4	4
わからない	9	9
總計	100	100

第9表 イギリスにおける脱黨後の政治的態度（%）

	脱黨當時	インターヴュー現在
宗教への轉向	6	8
極右派	—	2
保守派	2	2
穩健左派	58	78
極左派	8	—
勞働組合	6	4
無關心	14	4
その他	2	2
わからない	4	—
總計	100	100

なつていき（極左派に屬するものは全くいない）、政治的無關心のパーセンテージが極めて低い。かかる現象は、イギリスにおいては穩健左派の運動がよく下層集團の利害を代表しており、かつ前黨員に對しては寛容の態度がとられ、彼等はふたたび一般社會に順調に同化していくことができることを示唆しているといえよう。それに對して、フランスとイタリーでは、左派系の政黨が無力であり、政治的無關心が多い點を注意すべきであろう。イタリーの場合、政治的無關心は脱黨當時には四一%にも達し、インターヴュー現在でも三三%の多きにとどまつている。

時期別にみると、前期黨員は後期黨員と比べて、脱黨後に極左派に轉向するものが二倍も多い。後期黨員の多數は、脱黨後は政治的無關心になつていく。第十表の階級別の比較においては、脱黨當時、中産階級には極左派に轉ずるものが目立つ（インターヴュー現在では、穩健左派に移行しているが）。と同時に、政治的無關心も相當數あり、インターヴュー現在では、穩健左派に次いでの主要な範疇である。勞働階級は穩健左派と勞働組合活動の二つが主要な範疇となつてい

第10表 階級別にみた脱黨後の政治的態度（%）

	中産階級		勞働階級	
	脱黨當時	インターヴュー現在	脱黨當時	インターヴュー現在
宗教への轉向	3	6	9	9
極右派	1	2	2	3
保守派	1	2	—	—
穩健左派	37	43	28	39
極左派	22	7	14	4
勞働組合	3	6	22	18
無關心	21	22	12	14
その他	—	2	8	6
わからない	12	10	5	7
總計	100	100	100	100

第11表 地位別にみた脱黨後の政治的態度（脱黨當時）（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員
宗教への轉向	7	4	4
極右派	—	—	6
保守派	—	1	—
穩健左派	34	33	29
極左派	10	26	22
勞働組合	16	8	13
無關心	21	19	6
その他	2	3	10
わからない	10	6	10
總計	100	100	100

第12表 地位別にみた脱黨後の政治的態度（インターヴュー現在）（%）

	一般黨員	下級黨員	上級黨員
宗教への轉向	10	3	4
極右派	2	1	4
保守派	3	—	—
穩健左派	42	41	39
極左派	2	10	6
勞働組合	9	17	12
無關心	17	21	17
その他	4	3	6
わからない	11	4	12
總計	100	100	100

る。地位別にみると（第十一・十二表参照）、脱黨當時に極右派（六%）か極左派（一二%）かに走る傾向は、上級黨員にのみ認められる。彼等には、政治的無關心の態度をとるものは少ない。このようなデータは、上級黨員の脱黨者は、彼等が黨において得ていた満足を與えてくれるような代替物をしきりに見出そうとしていることを示唆している。このことはまた、彼等が以前のイデオロギー的立場の幾ばくかを保存しようとし、それ故、黨との袂別が極度に困難であることを裏づけているわけである。インターヴューの現在に至ると、ごく大雑把にみて、各地位のあいだには大差がなくなっている。かくて、政治的再調整の過程は、最初はそれぞれ異って出發しつつも、最後はほぼ同じように終着するものとみてよい。

なお、情緒的欲求を満足させるために入黨したものは、脱黨後には如何なる方向に向うかという問題は、興味あるデータを提供している。すなわち、情緒的に不調整なものは、脱黨後、極端の反對方向へ走るという假設は、一般的に、第十三表によつて支持されている。インターヴュー現在をとると、イギリス・アメリカの神經症者の一二%が、宗教ないしは極右派へ轉向している（イタリー・フランスでは一五%）。いずれのグループにも神經症者の政治的無關心のパーセンテージが高い。このことはまた、共産主義運動に特徴的にみられる政治に對する異常な強調からの極端な反動をあらわすものと看做される。

脱黨後の政治活動　最後に、脱黨者が、現在、各種の政治集團においてどのように活動し、どのような役割を演じているかについて、一言しておかねばならない。國別にみると、アメリカとイタリーでは、脱黨者は全く不活動の狀態にある。アメリカの場合では、黨員は實質的には情緒的に不調整なものが多いこと、黨員に對する制裁が嚴格であることが原因している。イタリーの場合では、脱黨者が満足すべき政治集團が缺如していることが、彼等をしてますます政治から後退せしめていく原因となつている。地位別には、やはり上級黨員であつたものが、組織的リーダーシップの地位を取得し、主として、勞働組合と左派政黨の運動の中で活動しつづけている。中産階級の脱黨者は勞働階級より不活動的であり、とくにこの現象は、アメリカに際立つて示されている。その理由は、中産階級の大部分が情緒的不調整の問題から共産黨に

第13表　欲求のタイプとの關連における政治的態度

（インターヴュー現在）（%）

	イギリス・アメリカ		フランス・イタリー	
	神經症者	非神經症者	神經症者	非神經症者
宗教への轉向	8	6	9	5
極右派	4	2	6	—
保守派	2	4	—	—
穏健左派	49	65	24	26
極左派	—	—	3	15
勞働組合	8	13	12	15
無關心	17	4	31	23
その他	1	2	9	5
わからない	11	4	6	11
總計	100	100	100	100

参加しており、黨内で蒙った幻滅感が政治一般への幻滅感と結びついてしまっているからであろう。それとともに、以前の黨員に對する制裁が知識階級に強い反應を示し、彼等が公職につく資格を失わしめていることにも基因しているのである。

六　むすびに

今や、共產主義者の行動樣式におけるシニシズムやネガティヴィズムが明るみにだされた。そもそも共產主義運動は、人間的・倫理的意味內容をもつものであった。十九世紀の社會的害惡に對するプロテストとして烽火をあげたマルクス主義の崇高な倫理的目標は、レーニン・スターリン主義への歷史的發展において前面に押しだされた倫理的に危險な手段性のために、却って現實から遠退いてしまった。現在のかたちでもって、果して共產主義は歷史の腐蝕に堪えていけるかどうか。アーモンドはいう。「深入りした共產主義者は、教義上の不信仰の危險性の故に、たとえ彼がその行動によって深甚な當惑を感じようとも、黨に固執していく。彼は、倫理的・政治的認知についての黨の方式にかこつけて、これらの危惧を逃れ、外界の極惡さを面白がっている。というのは、そうすることによって、自分自身の害惡をより堪えやすいものにし、イデオロギーの數珠玉をいじくり、戰術的美德を養いながら冷徹に歩を進められるからである」。

このような現代共產主義に對する倫理的評價についての賛否はともかくとして、アーモンドの態度自體は特定のイデオロギー的立場に執われ、神々の鬪爭に捲き込まれたファナティックなものではない點をわれわれは强調したい。これまでになされてきた事實發見は飽くまで經驗的研究に忠實であり、アーモンドは、その研究過程に、何らかの價値判斷をひそませたり、倫理的衝動によって事實や方法を歪曲してしまうようなことを愼重に回避していることは明らかであると思う。彼は、この研究成果に基づいて、最後に共產主義の滲透を阻止するための政策的アプローチを提示している。勿論彼は、アメリカの政策に積極的關心をよせているが、それにしても、それに對する批判には嚴しいものがある。しかも彼の態度は、徒らに共產主義のアピールを拒否しようというのではなく、行動している共產主義者の現實態を緻密に分析した結果、すなわち、人々が何故共產主義運動に參加し、それから離反していくか、という根本的テーマを解明し、共產主義への感應性を助長しがちな狀態や態度における脆弱性を充分理解した上で、自由世界の立場を前提として、共產主義に對處すべき政策に役立つ示唆を與えようとするのである。ここにそれを詳しく記している餘裕はない。アーモンドは、アメリカの政策として、ヨーロッパの統合を促進する經濟的援助と西歐的傳統の復歸に望みを託しつつも、同時に、これらの地域における共產主義のアピールが、“stomach” communism というよりは、“heart” communism であることを看過している側面を鋭く突いている。

共產主義のアピールは、過去十五年ないし二十年のあいだに、その魅力を失いかけていることが示された。アーモンドの研究によって、新たに補充された黨員のあいだに、共產主義の形式的イデオロギーの影響が衰退しつつあることが實證された。確かに、一般大衆

は、アーモンドのいうエクソテリックなマス・アピールのみを感受しているにすぎない。しかしながら、イデオロギー自體の眞僞性の論爭は別として、共産主義イデオロギーのアピールがいわば社會心理學的な問題として取上げられることは、そのイデオロギーの沒落を告げていることにはならない。むしろ逆に、そのカウンター・アピールとしての自由主義的イデオロギーが、如何に色褪せたものであるかをわれわれに證據立ててくれるようなものである。この點は、アーモンド自身も率直に認めている。現代の西歐世界は、とくに共産主義に代るべきイデオロギーを確保しているどころか、すべてのイデオロギーに對する不信仰が救い難き混亂をひき起しているというほかない。この《精神的空白》こそ、共産主義のつけ入るところであることを、われわれは認めざるをえないのではないか。われわれはまた、今日しばしば共産主義が「世俗的宗教」であると指摘されている理由を充分頷づけよう。

アーモンドの本書は、われわれにきわめて多くの示唆を與えてくれている。こうした研究は、わが國のケース・スタディにとつても役立ちうるであろうし、その場合に、本書の Appendix 2. Interviewing Guides はよい參考となろう。このような調査研究をおこなうには、厖大なデータが入手可能でなければならないし、かつ、それらを正確に分析していく技術をもつた專門スタッフの協力を得なければならない。それには、相當な資金と時間を要する。こういつた點からみれば、本書の如き研究は、アメリカでのみ可能であり、したがつてまた、アメリカ的なものの典型であるといえる。われわれにとつては、あるアプローチなり理論なりがすぐれたものであり、利用價値のあることが判つていても、實際には、實行不可能ではないにしても、困難なことがあるであろう。勿論われわれは、アメリカでおこなわれた方法を受けとる時、それをわが國でテストしてみることに、一體どんな意味があるのかを、問うことが先決の問題にちがいないが。